Endless Distance

七海くれは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｄｉｓｔａｎｃｅ

【Ｎコード】
Ｎ２４４６Ｏ

【作者名】
七海くれは

【あらすじ】
―僕なんて、いなくなってしまえばいい―

そう思っていた僕を思い止めてくれた、先生。
僕は先生に……恋をした。
そこに現れた新たな少女。
僕は彼女にも……憧れた。
長すぎる距離。遠すぎる心。

手を伸ばせば、それに届くか。

誰もが夢見る『Ｐｒｅｃｉｏｕｓ　Ｍｅｌｏｄｙ』を捜し求める青春ストーリー。

その外伝となる今作は、『Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｄｉｓｔａｎｃｅ』を共にする相手を捜し求めるもう一つの青春ストーリー。

挫折を乗り越え、その手に掴め。

序章：見えない明日を見るために

わかってる。わかってるんだ。
でももういいんだ。僕なんか。
逃げても逃げても追いかけてくる。
何処まで行っても追いかけてくる。
僕はそれから逃れる術を知らない。
知り得ない。どうしても。

入学当初から、僕はクラスの連中にいいように扱われていた。
顔を見るなり『あれ買ってこい』だの『これやっとけ』だの『代わりに怒られてこい』だのと言われてきた。
ちょっとでも思うようにいかなければ、殴る、蹴る。
もういい加減慣れたさ。一日に両手で数え切れないほどやられれば。

その後僕は、一切の感情を失った。
全ての依頼において『はい』と一言発した後、行動に移る。
笑顔？　顔が疲れる。
涙？　そんなものはとうの昔に枯れ果てた。

そんな日々が何日も続き、ついには３６５日を数えようかというところまで達していた。
だけど僕は一言も発せず、表情を変える事もせず生き続けた。
いや、違うな。僕はあの時から『生命活動』をしていなかったんだ。
ならば『生き続けた』という表現は間違っているな。言い換えよう。
……『そこにいた』。いや、これもどうだろう。

いた？　存在があった？　あったのか？
僕には存在があったのか？　僕は存在していたのか？？　ボクハソンザイシテイタノカ……？
存在があったという自覚はある。
だが自覚だけでは『そこにいた』ことの証明にはならない。
誰かが、若しくは何かが僕自身の存在を証明してくれない事には、僕は存在している事にはならない。
だがどうだろう。今この世界に、僕の存在を証明してくれる物はあるのだろうか？　いや、ない。
少なくとも、いま僕の手の届く範囲には。

気がついたらこんな所に佇んでいた。ここは何処だ？
……学校の屋上か。何故僕はこんな所にいる？
ここにだって僕の存在を認めてくれるものはない事は分かっているのに。
クラスメイトに忘れられ、教師に忘れられ、友人に忘れられ、幼なじみに忘れられ、家族にも忘れられ。
僕は誰なんだ？　その答えはどこにもない。なければ作ればいい。作り出せるのは自分しか居ない。
……そうか、僕は存在意義を『創りに』来たんだな。
その答えは、確かにここにある。しかも目の前にある。
僕はフェンスによじ登り、向こう側に移る。
その際に、フェンスのサビが付着してやや制服が汚れたが仕方がない。
これから僕がしようとしていることは、一人の人間の存在意義を取り戻すという大きな作業。多少の犠牲はやむを得ない。

眼下のグラウンドを見下ろす。数名の生徒が球体に群がる。
彼らは、その行動に自己の存在意義を見い出しているのだろう。
幸せなものだ。

別の方向を見ると、花壇に群がる女子生徒が数名。
この位置からでは、彼女らが何をしているかは定かではないが、恐らくその行動も存在意義の証明なのだろう。
何やら騒がしくなってきた。グラウンドの生徒も花壇の生徒もこちらに注目しているようだ。そう見えただけかもしれないけど。
しかし、風が心地いい。まるで、これからの僕を祝福しているかのようだ。
僕は靴を脱ぎ、意味もなく揃えてみたりする。そして、目を閉じる。
次に目を開けるときには、きっと存在意義を見つけていることだろう……。

その時、不意に体が軽くなったような感じを受けた。
落ちてゆく。抵抗もなく。一種の浮遊感すら覚えた。
僕はゆっくりと目を開け、眼前に広がる景色を確かめた……が、先ほどと全く変化がない。何故だ？
それに加えて、何かに抱きかかえられているような錯覚を覚えた。
いや、それは錯覚ではなく、確かな感触。
僕は何者かに抱き止められていたのだ。誰だ……？
恐る恐る後ろを振り返る。そこにいたのは、若い女性だった。
若いと言っても、僕よりは当然年上だが。
さらに、その瞳には涙を浮かべていた。
その疑問は、彼女の言葉によって解明されることとなった。
「どうして……？　どうして飛び降りようとしたのよ？　ねぇ、どうしてよ！？」
どうしてと言われても……僕はただ自分の存在意義を取り戻したかったから……と言おうとしたが、言えなかった。いや、言わなかった。
何故見ず知らずの人間にそんな事を話さねばならないのだ、と思ったから。

「答えてよ……。お願いだから……。そうじゃないとわからないでしょ……？」
さらに涙を流しながら尋ねてくるが……わからない。
何故この人はこうまで僕を気にかけるのだ。僕は貴女を知らない。
「あの……貴女はいったい誰なんですか？　どうして邪魔をし……」

ぱしぃぃぃ……ん。

3月初旬の春めいた空に響き渡る乾いた音。それが回答となった。
僕は、言い終わる前に頬を叩かれてしまった。そして……すぐさま抱きしめられる。
彼女の髪から香るものは、僕の荒みきった心を癒してくれるかのようだった。
「私は……あなたの事よく知らない。でも、目の前で命を捨てようとしている人を見過ごすなんて出来るわけがないじゃない！」
命を……捨てる……？
「ね、落ち着いたらでいいから、何でこんな事しようとしたか教えてくれないかなぁ？」
落ち着くも何も、僕は終始冷静だ。あなたこそ落ち着いたらどうだ。
「命というものはね……、何よりも大切なものなの。誰のものも奪っちゃダメなの。勿論、自分で自分の命を絶つことも……」
「あの、だから貴女はいったい誰なんですか？」
たまらず聞いていた。
「私？　私は霧原千奈美。4月からここの先生やることになったの。ほら、産休を取った先生の代わりよ」
先生……か。ならば私服で校内をうろついているのも納得できるな。そのわりには若く見える。高校生と言われても違和感はない。
「なによー、ジロジロ見ちゃって。ね、もう落ち着いたかなぁ？」
「えぇ、まぁ……」

建前である。とりあえず肯定しておけば当たり障りはない。
「じゃあさ……ちょっといいかな？　こんな所じゃ話しにくいでしょ？」
そう言うと先生はフェンスをよじ登る。その身のこなしは、どこか猫を思い浮かべてしまった。
「ほら、キミも早く。落ちちゃうよ？」
促されるまま向こう側に戻ると、すぐさま尋ねられる。
「それじゃあ、何で飛び降りようとしたか教えてくれないかなぁ？」
「えっと……その……」
何故だ、何故このような反応をしてしまう。
これではまるで、今まさに飛び降り自殺をしようとした事を認める形になってしまうではないか。
「ゴメンね、やっぱりいい。そういうことって、話したくないよね」
そこまで言うと彼女は立ち上がり後ろを向く。
「どんな理由があったにせよ、自殺なんかしちゃダメ。あなたが死ぬ事で悲しむ人は大勢いるの」
その言葉が妙に僕の胸にのしかかる。僕がいなくなることで……悲しむ人が大勢いる……。そうなのだろうか……。
「それじゃあね。他の先生達には私がうまく言っておくから」
言いながらドアを開ける。そして、いなくなる。
「もしかしたら……また会えるかもね」

「存在意義……見つかったな」
少々段取りは変わってしまったが、僕は自己の存在意義を見つける事が出来た気がする。
少なくともあの人には、僕が見えるらしい。
少なくともあの人は、僕の存在を認めてくれるらしい。
あの人は、明日を見い出せなかった僕に明日を見せてくれた。

僕の名前は嶺山拓真。どうやら僕は、もう少しこの世界で生きていてもいいらしい。

もうすぐ2年生……か。

第1章：初めての顔合わせ

今日から中学2年生というわけで、僕は全てをリセットした状態で学校に向かう。
あれから1ヶ月だろうか、存在意義を見つけようとして躍起になっていた頃から。

正面玄関に差し掛かると、黒山の人だかり。クラス編成の用紙をもらうために生徒達が群がっているのだ。
僕もその波をかき分け、その用紙をつかむ。
だが、知っている名前などほとんどなかった。あったところでどうでもいいのだが。
C組か。まぁ、だから何だというレベルなのだが。

誰も真剣に聞いていないであろう退屈な始業式が終わると、各クラスの担任が紹介されていった。
ここは誰しも、興味津々と言った面持ちで眼前の舞台に注目している。
だが僕は、去年度の一件から、教師も信用しがたくなっていたので聞き流していた。
僕は足早に自分の教室である2－C教室に行った。誰かと交わる事もなく。

僕が着いた頃には、すでに何人かの生徒が着席していた。
どうやら席は教室前方の黒板にびっしりと書かれているようだ。
場所はやや後方の席。まぁ目は悪い方ではないし大丈夫だろう。
その席に着くと同時に、隣の席の女子に話しかけられた。
「あ、アンタがアタシの隣の人ね？」
いきなり馴れ馴れしい口調だ。初対面の人間に向かってアンタは

ないだろう。
「アタシの名前は原田みさき。よろしくねー！　あ、呼ぶときはみさきでいいわよ。ね、アンタのお名前は？」
「僕は……嶺山拓真」
「ふ～ん、いい名前じゃない。覚えやすいしね！」
「お、何だ何だぁ？　もう友達出来たみてぇだな」
そこに割り込んできた小柄な少年。どうやら彼女と顔見知りのようだ。
「あ、圭輔！　そうなのよー。この子、アタシのお隣さん」
「あ～あ、みさきの隣になっちまったか。諦めろ、こいつの隣になっちまったんじゃ授業中に寝れねぇぞ？」
いきなり何を言い出すのだろう……。僕は授業中に寝ることなんてないのに。
「おっと、自己紹介が遅れたな。オレは秋野圭輔ってんだ。呼ぶときは圭輔でいいよ。お前は？」
「僕は……嶺山拓真」
「なるほど……。んじゃミネタクで」
「あ、それいーねー！　ミネタクかぁ～」
僕に拒否権は与えられていないのだろうか？　全て彼らが勝手に決めてしまっている。
ミネタクという聞きなれない単語は、どうやら僕につけられたあだ名のようだ。
彼らにそう呼ばれたら、返事をしないといけないのか。
と、その時であった。教室のドアが開く音が聞こえてきた。
「あ、先生来たみたいだな。んじゃーミネタクにみさき、また後でな」
そう言うと……圭輔くんは自分の席に戻っていった。彼の席は教室前方のドアに最も近いところに位置していた。
教卓に先生が立つ。かなり若い女性だ。

……ん？　どこかで見たような顔だな。
そう思ったと同時に、その女性は黒板に文字を書き始める。……名前だ。
記憶が間違っていなければ……彼女はあの日、僕の存在意義を認めてくれたあの人だ。
「え～っと、もう始業式のときに言ったと思うけど、もう一度自己紹介するね。私の名前は霧原千奈美といいます」
霧原……千奈美。そうか、この人はそういう名前なんだ。
前回出会った時は名前を聞いていなかったな、そういえば。
「本当は柏木先生がこのクラスの担任になるはずだったんだけど、産休に入られたので副担任の私が代わりに入る事になりました。まだまだ先生としてはホントに未熟だけど、精一杯頑張りますのでよろしくねっ！」
言い終わると同時に拍手が巻き起こる。僕もつられてやってしまっていた。慌てて止めたのは言うまでもないが。
しかし……あの人が僕の担任になるとは。世間は狭いものだな。
と、その時。右の脇腹に変な感触を覚えた。隣の席のみさきさんが僕の脇腹をペンでつついているのだ。
僕は先生に気付かれないように、小声で応対した。
（な……何？）
（アンタさぁ、あの先生どう思う？）
（どう思うって……まだわかんないよ）
（そーゆー『どう思う』じゃないんだけどなー……。アレよアレ。技術的、内面的なことじゃなくて外っツラ見てどう？　って事よ。）
（外っツラ……。つまり、外見？　えっと……）
僕は言いかけた……が、その言葉を遮るように先生は次の話題に入っていた。
「あ、そうだ。みんなに紹介したい子がいるんだけど……聞いてくれる？」
その言葉に全員が反応する。紹介したい子……？　転入生か何か

だろうか。
「いいみたいね。て言うかダメなんて言わないよね？　それじゃ入ってきていいわよ」
そう言うと先生はドアをゆっくりと開けると同時に、ややうつむきながら女の子が入ってくる。やはり転入生だ。
先ほど書いた自分の名前を消した後、再びチョークを走らせる先生。
どうやらそれはその女の子の名前のようだが……読めない。
僕の目が悪いのでもなく、席が黒板から遠いでもなく……単純に漢字が読めないだけだ。
僕は漢字にはあまり強くないからな……。
「えっと、うち……じゃない、私は柚月凛子といいます。お父さ……あっ、父の仕事の都合でこちらに引っ越してきました」
緊張しているのだろうか、言葉がたどたどしい。
「この街にはまだ来たばかりで何にも分かりません。なのでいろいろと教えてくれたら嬉しいかなーなんて思ってます。よろしくお願いしますっ！」
言い終わると同時に拍手が巻き起こる。……さっきと同じじゃないか。まぁここは彼女の頑張りを讃えてあげると言う意味で、僕も普通にやったけど。
と、その時。右の脇腹にまた変な感触を覚えた。これもさっきと同じだ。
（ねーねー、あの子はどうなのよ？　あと、ちなみちゃんの事も聞いてなかったね。さー観念してしゃべっちゃいなさい！）
えぇ……そんな。みさきさんはもう先生をちゃん付けで呼んでるし……。
しかも観念してって何？　僕は何か悪いことしたのかな……？
仕方ないからとりあえずその場しのぎの事でも言っておこうかと思った矢先……。
「えっとぉ～、柚月さんの席だけど……。ん～嶺山くんの隣が空い

てそうね」
僕の隣……。確かに左隣は空席だった。てことは、柚月さんは僕の隣に来るのか。
ゆっくりと椅子を引き、彼女が座る。まだ緊張が幾分残っているように見受けられた。
そして、先生が口を開く。
「今日はこれで……終わりなのかなぁ？　えっと……あ、終わりみたいね。それじゃあ……きりーつ！」
その声に呼応するようにクラス全員が立ち上がる。まだ慣れてないみたいだな……。ちょっと不安も残るけど、そこは先生もこれから慣れていけばいいことだろう。
何にせよ、これで今日はおしまいだ。
さって帰ろうかな……と思ったが、その行動は隣の女子によって阻まれた。……みさきさんだ。
「何よー、アタシの質問に答えないまま帰ろうってのー？」
……どうやら、彼女はどうしても僕に先生と柚月さんの第一印象を聞きたいらしい。
いよいよ観念して喋ろうかと思ったが……そこに乱入者が。
「おいおい～、そんなイジめんなよ？　ミネタク困ってんじゃんか」
圭輔くんだ……。これは助かったのか？　またややこしくなりそうな気が……。
しかし彼は、その一言を発しただけで、僕の脇をすり抜けて行ってしまった。どうやら圭輔くんは柚月さんに用があったらしい。
「はじめましてかわいこちゃん。ボクの名前は秋野圭輔。下の名前で呼んじゃってください。この出会いを価値あるものにするため、今から語り合いませんか？」
え……えぇ～……。そんなセリフをよどみなく言えるあたりさすがだ……。
「またアンタそれ？　……はぁ、まったく懲りないわよね」
懲りないって……まさか、圭輔くんはこういったシチュエーショ

ンだと必ずこうするのかな？
「えっ？　それは……うちに言うてるんですか？」
「そうそう。まぁ、語り合うってのは言葉のアヤで、ホントのところはこの街の事を教えてあげよっかな、なーんて思ってるんだけど、どう？」
「う～ん……。せっかくやからお言葉に甘えさせてもらおかな」
「お、マジ？　そんじゃ決まり！　もちろんお前らも行くよな？」
「アタシはもちろん行くわ。ミネタクはどうする？」
「僕は……別に帰ってもすることないからいいよ」
「よーし決まり！　それじゃあ凛子ちゃんに、オレらの街を案内してやろうぜ！」
　こうして僕たちは、柚月さんを連れて歩き回る事にした。もちろん一回家に帰って。

「……とは言ってもなぁ、別にこれと言った名所はないんだよな……」
「じゃーさー、アタシらがよく行く店だけでもいいんじゃないの？ほら、ミネタクも知らなさそうな店とか」
「そうだな。あそこなら安いし、だべるには最適だしな」
「んじゃ決まりね！　ミネタクに凛子ちゃん、コーヒーって好きよね？」
「うん、まぁね」
「うちも嫌いやないよ。なに？　喫茶店でも行くん？」
「まぁ、そんな感じ……。もう少しだからな」
　僕らは圭輔くんとみさきさんに先導されながら、通いなれた道を歩く。
　しばらくしたところで、人気のない裏路地にさしかかる。
　そこをさらに進むこと数分。眼前には古めかしいたたずまいのお店が。
「なんだミネタク。開いた口がふさがらねぇって顔してるじゃんか」

「えっと……、なんなのここ？」
「かぁ～、ホントお前はしょーがねぇな。見てわかんねーか、駄菓子屋だよ。ここのばーちゃんがいい人でさ、奥の居間を使わせてくれるのよ」
「で、麦茶とかコーヒーとか入れてくれるってわけ。子供が好きなのよねー、きっと」
「へぇ～、そうなん。変わってていいなぁ」
「でしょでしょ？　もう小学校のころから使わせてもらってるのよ」
「とにかくさ、入ろうよ。ここじゃちょっと通る人の邪魔になりそう……」
「おっとっと、そうみたいだな。んじゃさっさと行っちまうか」

ゆっくりと店内に入ると、そこには所狭しと駄菓子やらおもちゃやらが並べられていた。
奥には畳張りの一室が見え、おばあさんが座っている。なんというか、ノスタルジーを感じた。
自分の住んでるところなのに、まだまだ知らないところって多いんだな……。
そういうのを教えてくれた圭輔くんやみさきさんには感謝しなきゃな。
こんな光景に目を奪われていると、いつのまにか僕の隣に柚月さんがいた。
「あ、柚月さん」
「なぁに？」
「あ、ごめん、呼んだわけじゃなくて隣にいたからつい」
「そうなんだ。あ、そや。ねぇねぇ、うちもミネタクくんって呼んでいい？」
「あ、別にいいけど……」
今日初めて呼ばれたあだ名だけど、僕自身あまり嫌な気はしないし、みんながいいんならこれでいいだろう。

「よかったー。おおきになー。それじゃーうちの事も名前で呼んでええよ」
「名前で……。凛子さんとか？」
「そうそう。でもホンマよかったわぁ。圭輔くんにみさきちゃんもいい人やし」
ここまで話したところで、凛子さんは何故か伏目がちになってしまう。
「……うちな、前の学校であまり友達できなくて、いっつも独りやってん」
「えっ……」
僕と……同じだったのか？　いや、僕はいじめられはしたものの誰かしらに構ってもらってたからその意味では違うかも……。
「いじめられはせんかったけど、みんなから無視されて……。うちが何したって言うんや……」
いや、無視は立派ないじめだ。そこから本格的になっていくんだから。体験した僕にはわかる。
「こないな事、ホンマは言いたくなかったけど……。けどミネタクくんとかになら話せる気がしたの。あはは、何でやろね。まだ今日会うたばっかりやってのに」
「もう……忘れた方がいいよ」
「……えっ？」
凛子さんの告白を聞いた僕はいてもたってもいられなくなった。
そんな記憶、覚えていても何もいいことはない。
僕も、忘れる事で今こうしていられるのだから、忘れた方がいいと教えてあげるのだ。
「忘れた方がいいんだ……そんなこと。覚えてるから思い出して悲しくなるんだ……」
「ミネタクくん……まさか？」
「お察しの通り。僕も1年生の頃いじめられてた。……死のうとまで考えた」

「……ごめん。うちが変な事言ったから思い出させちゃったね……」
「いや、凛子さんは悪くないよ。それよりもさ……これからだよ」
そう、これからなんだ。僕も凛子さんも、昔の嫌な思い出を捨て去って、今のこの楽しい時間を思い出にしていく事が大事なんだ……。
と、そこに圭輔くんたちがやってきた。
「なぁなぁ、2人で何話してたんだよ？」
「えっと……その……」
「うー、何でそんなこと知りたいんよ？　わかった、圭輔くんってスケベやろ？　せやからうちの事とか知りたいんやろ？」
「鋭い！　そうなのよー、こいつったらすーぐ女の子が気になるのよねー。ミネタクはこんなヤツみたいになっちゃダメよー？」
「う……うん」
「がっびぃぃぃぃ……ん。ミネタク、お前だけは信じてたのに……。いーよ、オレはすけべぇですよ～ぃ……」
僕が悪いのか？　というかこの落ち込みようは凄いな……。
「ちぇっちぇっ。せっかく凛子ちゃんには特別に奢ってあげようかと思ったのになぁ～」
「え、奢ってくれるつもりやったん？」
「そうだけど……スケベなんて言われっちまったしなぁ～、どうしよっかなぁ～」
「うちが悪かったわぁ。許してーな～」
「ハッハッハ！　オレが女の子からの頼みを断るわけは無いだろう？」
「あーら、じゃあアタシの頼みも聞いてくれるわよねー？　ねー！？　アタシも女の子だもんねー！？」
「くっ……揚げ足取りやがって。あーわかったよ！　ミネタク、ついでだからお前も奢ってやる！」
……無理してないかな、圭輔くん……。
「いや、僕は……」

「遠慮すんなって、な？　オレがいいって言ってるんだから。それに駄菓子だし、せいぜい１００円かそこらだよ」
「でも……申し訳ないよ……」
その時だった。圭輔くんはこれ以上ないといった真剣な眼差しを、僕に向けてきた。
「……ミネタク、お前はまた同じ道を辿るのか？」
核心を突かれた気がして、僕ははっとした。
同じ道を辿る……存在意義を見つける……違う。
それは僕自身の勝手な思い込みであって、本当は嫌な事から目を背けて逃げていただけなんだ。
あの時はそう思う事が出来ず、ただ周りの環境のせいでこうなってしまったと責任転嫁していたんだ。
自分を正当化し、自ら壁を作っていただけだ。
でも……何で彼にはそれがわかったんだろう？
「……何で分かるんだって顔してるな。実はな、さっきの凛子ちゃんとの話、ちょこっとだけ聞こえたんだよな」
「え、じゃ何でさっき凛子さんに聞いたんですか？」
「いやな……お前らの話聞いてる限りだと、彼女にも過去の傷があるんだろ？」
「えぇ、まぁ……」
「だから、オレが聞いてやることで少しでもその傷を癒してあげたいと思ったわけ。あ、下心とかそーゆーの一切なしで」
それは分かっている。あの真剣な目を見せられてはそう思わざるを得ない。
「ってかミネタクよ、お前今一瞬敬語になったべ？」
「……うっ、そうだっけ？」
「ま、それはどうでもいいや。ともかくな、さっきはあの娘に誤解されちまったけど、それならそれでいいんだ」
だったらさっき僕にやった態度を見せればいいのに……と思ったけど、女の子の前ではできないのだろう。

「それにさ、お前に話すことでちっとは楽になったみたいだし……な。だったらわざわざオレが出るまでもないと」
この時の圭輔くんの表情は真剣そのものだ。嘘偽りは無いだろう。
「ま、積もる話はまた今度な。とりあえず奥行こうぜ。ばっちゃーん！　４人入るけどいいかなー？」
「えぇえぇ、どうぞどうぞ。ゆっくりしていってねぇ。ほっほっほっほ」
優しそうな声に誘われ、僕らは駄菓子屋の奥へと進む。

テーブルの上に駄菓子（結局、約５００円分を全て圭輔くんが購入した）を広げると、再び雑談が始まった。
「ねーねー、圭輔くんとみさきちゃんって付き合うとるのん？」
「ぶーーーーーーー！？」
雰囲気を読まない凛子さんの突然の発言に驚いた圭輔くんは、口に含んでいた麦茶を盛大に霧状に噴出した。
「ちょっと～。何やってんのよも～」
「し、しかしだな……。いきなり聞かれたから……」
「さっきうちに聞いたやん？　お返しよ。で、どうなの？」
「付き合ってない。ただの幼なじみなだけであってだな」
「そーそー。何が悲しくてアタシがこんなヤツと付き合わなきゃなんないのよー？」
「ちょっと……こんなヤツって言い方は言い過ぎなんじゃ……？」
「いいんだミネタク。こいつは口で言ってもわからないからあとで拳で分からせておく」
「あーら言ってくれるじゃないの。アンタみたいなチビ輔に殴られたって痛くなんかないわよーだ」
「んだとぉ！？　ちっくしょー今に見てやがれ！　ぜってーいつの日か身長１８０ｃｍを超えてやるからな！　ケッ！」
あぁ、すねちゃった。どうやら圭輔くんに対してのチビ発言はタブーらしい。僕も気をつけよっと。

それから色々と話し込んでいたら、いつの間にか日が傾きかけていた。
「おっと……。もう5時か」
「そやねー。……あ、うち門限6時やからそろそろ帰らんとお母さん心配させてまう……」
「じゃあぼちぼち帰らなきゃね。アタシは門限とかそーゆーのないけどねー」
「ええな～みさきちゃん。あーあ、うちももっとみんなとお話してたいわ……」
「いや、親御さんを心配させるのはよくないと思う」
「そうだな、ミネタクの言う通りだ。じゃ、オレら家まで送るよ。何かあったら大変だしな」
その言葉と同時に席を立ち、おばあさんに挨拶をする。
「今日は大勢で押しかけてしまって、すみませんでした」
「いいんですよぉ。わたしゃ、あなたたちのような子の笑顔を見るのが何より大好きでしてねぇ。ほっほっほ。またいつでも来てちょうだいな」
貴重な体験をさせてもらった。僕は帰り際にも深々と頭を下げ、せめてもの感謝の気持ちを表現した。

目的地を凛子さんの家に決定し、歩き出す。
15分ほど歩いただろうか、ようやく彼女の家に到着した。
「ここがうちの家。住み始めたばっかりやからまだちょっと違和感あんねんな」
「あれ？　こっちにはいつ頃来たの？」
「えっとねぇ、3月の終わりごろあたりかな？　何とか前の学校の終業式も出れたし、こっちの始業式にも間に合ったんよ」
となると……まだ本当にこっちに来たばっかりなんだ。じゃあこの辺の事知らなくても無理ないな。聞かれたら出来るだけ教えてあ

げよっと。
「ほな、今日はおおきにな～。また明日もよろしくね！　ばいばーい！」
凛子さんが元気にドアを開けると、玄関先に彼女の母親らしき人が立っていた。
らしき人とは言うが、あまり顔が似ていない。となると凛子さんは父親似なのだろうか。
「ただいま……ってどしたのん、お母さん？」
「あら凛子、お帰りなさい。え？　お母さんどうもしてないけど……そちらのみんなは？」
「あ、うちのお友達なの。今日うちと遊んでくれたのよ」
「あらまぁ～、おおきに～。こんな子ですけど仲良うしてやってくださいね」
と言って彼女の母親は何度も頭を下げる。
そこまでされるとは思わなかっただけに、妙に照れくさくなってしまった。
「それじゃ、オレらは帰りますんで。おじゃましました！」
「おじゃましましたー！」
「……」
僕は軽い会釈だけを残し、その場を立ち去る。

3人で歩いているうちに学校の前に差し掛かった。もういい時間だから先生たちも帰るんだろう。
見ると……帰って行く先生方の中にひときわ若い女性の姿があった。僕らの担任、霧原先生だ。
「ねー圭輔？　あれってちなみちゃんじゃなーい？」
「あ、マジだ。先生も今帰りなんだな。しっかしかわいいなぁ～ちっくしょー！　一歩間違えば高校生にしか見えなくね？」
「……」
確かに彼女は、下手をしたら中学生である僕らとあまり変わらな

いような年齢に見えてしまう。
僕はいつしか……そんな彼女に惹かれていったのかも知れない……。

家に帰った僕は、自分自身の今日の行動を思い返していた。色々な事がありすぎた気がした。
圭輔くん、みさきさん、凛子さん、そして霧原先生との出会い。
今までにも似たような出会いはあったかも知れない。
だが僕は、その全てを避けていた。拒んでいた。自分の殻に閉じこもっていた。
結果として僕は、自己の存在意義を見失い、最終的には学校の屋上から身投げを試みていた。
あの時先生に止められていなければ……今この場に僕は存在していない。
そう、先生こそが僕の存在意義を確立してくれたのだ。
僕自身はなんだ、自分で自分の存在を消すところだったではないか。
……先生だけじゃない。
頼れる小さな兄貴分の圭輔くん。
面白いけど芯がしっかりしてそうなみさきさん。
僕と同じ苦しみ、悲しみを体験してきながらも、明るく振舞っている転校生の凛子さん。
みんな僕を受け入れ、仲間として認めてくれた。
僕はこれから彼らに、何が出来るのだろう？　何をしてあげられるのだろう？
今の時点ではまだ何もわかっていない……けど、見つける。見つけるんだ。
僕は今、確かにここにいる。生きている。
生きている限り、できるだけ。
それが僕に出来る、恩返しなのだから。

翌日、いつもの癖で早く学校に着いてしまう。
相変わらず教室内には僕しかいない……と思ったらそうではなかった。
なんと先生がもう来ていたのだ。
先生は、机の大まかな位置を示す目印になるテープを床に貼っている。
他にも、黒板が凄く綺麗になってたりとか、教卓には小さな花瓶まで置いてある。
そのとき、先生がふと顔を上げたので、僕と向かい合う格好になった。
「ふみゅ？　あ、おはよ。早いんだね」
「えぇ……まぁ……」
気恥ずかしくなってしまったので視線をそらすと、先生はあからさまな不満の声をぶつけてきた。
「も～何よ～。目ぇそらさなくたっていいでしょー？」
「すみません……」
「いーのよいーのよ。あなたって弟にそっくりだから、ついからかってみたくなっちゃうのよね」
「あ、弟さんがいらっしゃるんですか？」
「うん。新一郎っていうんだけどね、も～これが後ろ向きな性格で暗くって無口で、こんなんでやっていけるのかなーって心配なの。今中2だから、ちょうどみんなと同じかな？」
「同じ学校じゃないんですか？　少なくともこのクラスにはいないと思ったけど……」
「えっとね、生徒の身内が担任やるのってあんまりよくないらしいの。そのせいで生徒の方がクラスを変わったって話を聞いたこともあるし」
「そうなんですか……。いろいろあるんですね」

「そ～なのよぉ～！　教員免許取るだけじゃダメなのよ？　それから学校の採用試験通らないとダメなの。これがすっごく難しくって、もー大変なんだから～！」
　火がついたように僕にまくし立てる。僕に言ったって何も変わらないと思うのだけど。
「……でもね、やりたいことが出来る今はすごく満足よ。この仕事が出来て嬉しい。もちろんみんなと会えたこともね」
　先生は教卓に顎をくっつけるような体勢で、僕と話を続ける。
　教師としてそういう行動はどうかと思ったが、かわいいので言わないでおいた。
「まだまだ不慣れな点とか、教師として至らない点とかいっぱいあると思うけど、私がんばるからね！　ぶい！」
　そう言うと先生は胸の前でＶサインを作ってみせる。こういった行動は素直にかわいいと思うが、考え方等は大人のそれだった。
　その時、閉めていたドアが開かれ、凛子さんが現れた。
「あー先生とミネタクくん、おはよー！」
「あっ、柚月さんおはよう。あなたも早いのね？」
「うん。まだ何時に出たらええかわからんさかい、早めに出てみたんです。遅刻とかしたないし……。それにしてもミネタクくん早いね～。日直かなんか？」
「あ、違う。僕いつもこのくらいには来てるんだ。そしたらもう先生いてさ」
「そやったんか～。で、ちなみちゃんは何してはったん？」
「ちなみちゃん？　もしかしなくても私のこと？　先生に向かってちゃん付けね～。じゃ私も凛子ちゃんって呼んじゃうー！」
　いいんだ……ちゃん付けでも。さすがに僕には出来ないな……と思い、自分の席に座ろうとしたら、先生に止められた。
「あーちょっと待って！　そっちはまだテープ貼ってないの～！」
　何事かと思って床を見ると、確かに僕の席一帯はまだテープが貼られていなかった。

「僕がやりましょうか？」
「いいのよ、私の仕事なんだから！　ごめんね凛子ちゃん、お話はまた後でね」
そういうと先生は駆け足でこちらに近づき、再び床にテープを貼るという作業を続けた。
僕は邪魔をしては悪いと思い、凛子さんを連れて廊下に出た。

「やっぱり先生なんやね。話してると全然わからへんけど」
「そうだね……」
「前から先生やりたくて、そんでその夢をかなえたんかな。だとしたら尊敬するわぁ」
「そうみたい。やりたいことが出来る今はすごく満足ってさっき言ってた」
「あんなふうに自分の夢かなえた人ってめっちゃ偉いと思うのよ、うち。ミネタクくんにはあるの？　将来の夢みたいなの」
「……」
答えられなかった。
彼女は何気なく尋ねたのだろうが、話題にそれとなく盛り込めるという事は、ある程度のヴィジョンを確立しているのだろう。
僕は……考えた事がなかった。将来の事など、まだ先のことなのだから……。
「……ぇ、ねぇ、ミネタクってば！　おーい！」
「あっ……」
「あっ、じゃないわよー。どーしたのよこんな所に突っ立って」
気づいた時にはみさきさんが僕の目の前にいた。
「ほーら、教室入るわよ！」
「う、うん……」
促されるがまま、僕は教室に入る。
見回すと、すでに半数以上の生徒が来ていたが、その中に先生の姿はなかった。

「あれ……先生は？」
「あー、ちなみちゃんならさっき職員室戻ってったよ」
「そうなんだ……」
何気なく床に視線を落とすと、すでにテープが貼られている。
そうか、終わったから授業の準備とかするために戻ったんだな。

始業のチャイムが鳴り、先生がやってきた。それと同時に、席を立っていた生徒も着席する。
「みなさんおはよー！　えっとじゃあ、出席取りまーす。秋野くーん？」
圭輔くんだ。でもまだ来てないみたいだ。どうしたんだろう？
……と思った矢先の事だ。勢いよくドアが開け放たれたかと思うと、肩で息をしている圭輔くんが現れた。
「はぁ……はぁ……ごめん先生！　来る途中にネコが車に撥ね飛ばされたの見ちゃってさ、病院に連れてったら遅れちった！　遅刻だけはカンベン！　この通り！」
「ふみゅ～、そうなの？　わかったわ。じゃ、遅刻はなし！」
「へへっ、ありがとな先生！」
（……ウソつき。アタシ知ってるんだから。単に寝坊しただけでしょ）
みさきさんが小声でそう呟く。僕も内心そう思ったけど、先生はすっかり信じきっちゃってる。

こうして今日も、騒がしくも楽しい1日が始まろうとしている。
僕にとって何もかもが新鮮な、新たなる日常が。

第2章：そこに映る人は誰？

新しい学年になって2週間が過ぎようとしている。
やや日差しは厳しくなってはきたものの、まだまだ風は心地よい。
風薫る5月は目の前。僕はこの季節が一番好きだ。
「……はっくしょん！」
そう思っていた矢先、その考えを打ち消す場違いな音が。クシャミ？　誰だ？
「も～、嫌やこの時期！　やってられへんっちゅーねん」
音の主は、凛子さんだった。
「う～……、あ、ミネタクくんおはよーさ……っくしょん！」
「お……おはよう……。なんか辛そうだね」
「ごめんなー、やかましーて」
彼女の声は鼻声だった。これはもしかして……時期的に考えて、花粉症か？
花粉症というアレルギー症状のことは僕も聞いたことはある。でもここまで酷いことになっている人もいるとは知らなかった。
と、そこにこの空気をぶち壊すような元気な声が。
「おっはよー！　ミネタクに凛子ちゃん！　ねーねー、今日って何の日だかわかるー？」
いつもよりさらにハイテンションなみさきさんが僕らの元に駆け寄ってきた……と同時に何か質問してきた。
何の日かと問われても、これといって特別なことがある日ではないと思うけど。
「えー？　今日って何かあるん？　ぐすっ」
「あー、ちょっと2人には難しかったかもね。じゃあ圭輔来たらアイツに答えてもらうわ」
あ、圭輔くんは知ってるんだ。となると、みさきさんのプライベートに関わることなのかもしれない。

だとしたら何だろう？　まさか二人の交際開始記念日とかじゃないだろうし。

教室に入ってから程なくして、やや眠そうな顔をしながら圭輔くんがやって来た。

「あっ、来た来た。こっちこっちー！」

「うん？　呼んだか？」

「今日って何の日だかわかるわよね？」

みさきさんが、先ほど僕らにしたように質問する。

目をこすりながらも、凛子さんは回答を今か今かと待ち構えている。

僕も興味あるから、自然と耳をそばだててしまう。今日はいったい何の日なんだろう？

「今日……。あー、あれな」

やっぱり圭輔くんは何だかわかっていたようだ。僕らは次の彼の言葉が気になって仕方がない。

だが……圭輔くんは僕らの予想を越えた回答をした。

「今日は給食が肉じゃがの日じゃないかーーーーーーーーー！」

ガタンッ！！

あたた……。思わず転げてしまった。そんなの僕だって知ってるよ。

「そーよねー。今日は肉じゃがなのよね。ごはんはわかめごはんでぇ、これがまた合うのよねぇ～……って違うでしょっ！！　みさきちゃん、ちょーっぷ！」

掛け声高らかに、圭輔くんにチョップ……もとい脳天唐竹割りを決めるみさきさん。

勢いが凄いというか半端ではない。普通の殴打と変わらないではないか。

「ふわ～、ごっついツッコミやわ。本場とはまた違った味があんねんなぁ」

「ボケ！　スカタン！　何言ってんのよ！　んな事でこのアタシが喜ぶとでも思ってんの？　そりゃ嬉しくないわけじゃないけどさー、もっと何かあるでしょー？」
「あたた……。わーってるって。アレだろ？」
「何よ？」
「１週間ぶりに便秘が治った……んがっはぁ！？」
間髪を入れずに、圭輔くんのみぞおちに綺麗にボディブローを見舞ったみさきさん。それが答えとなっていた。
「いい加減面白くないのよ。これ以上やっててもラチがあかないから言うけどね、今日はアタシの誕生日なのよ～～～～～！！」
「あー、ホンマにー？　みさきちゃんおめでとー！　なによー、変にごまかさずに言うてくれたらよかったのに」
「ありがとねー。でもさ、ストレートに言ってもアレじゃん？　なーんかプレゼントねだってるみたいじゃん」
「ってて……。でも実際もらえたら嬉しいんだろ？」
「あら、もー起きたの？　もっと強くやったほうがよかったかしら？」
「いや、アレ以上はマジ勘弁」
「ま、そりゃー、ね。でもホントにいいのよ？　気持ちだけでいーの！　そのおめでとーの言葉だけで」
誕生日……か。僕はつい１ヶ月前に迎えたばかりだ。
ただ年齢をひとつ重ねただけで、特別何か変わったわけでもなかった。
そういえばあの日だったのかもしれない。
僕があんな行動をとった日は、実は僕の１３回目の誕生日だったのかもしれない。
……ダメだ、こんな事はもう忘れるんだ。新しい仲間と生きていくって決めたんだから。
「……っくしょん！　う～……。あ、ちなみちゃん来たよ。圭輔くん、戻ったほうがええで」

「あ、マジだ。ってか凛子ちゃん、つらそうだな……」
「この季節はいっつもそうやねん。ほなまたあと……っくしょん！」
「……」
心配そうに自分の席に戻ってゆく圭輔くんが、なぜか初々しかった。
結局この日は、隣でクシャミを連発する凛子さんが気になってほとんど授業に集中できなかった。
そういえば、初めて会ったときも目をこすったりしてるのをたまに見かけたけど、最近それがどうもエスカレートしている気がしてならない。
僕は花粉症ではないから彼女のつらさはわかってあげられないけど、隣に座っている以上は何かをしてあげるべきだろう。
……よし、明日はポケットティッシュをちょっと多めに持ってきてあげよう。

この日の授業中、隣のみさきさんが僕に声をかけてきた。
（ちょいミネタク、もしもーし？）
（何、どうしたの？）
（あのね？　さっきの英語の時間ね、アタシ思いっきし寝ちゃってさー、ノート書いてないのよー。悪いけど見せてくんない？）
（あ、いいけど。……はい）
（ごめんねー！　んじゃ借りるわよ）
僕はこっそりと、みさきさんに自分の英語のノートを差し出した。
……と思ったら数秒もしないうちに返ってきた。
（……どうしたの？）
（ゴメン、やっぱいいわ。借りといて悪いけど、アタシにはその個性的な字は読めないわ）
（あ……）
個性的な字、か。決して汚いというわけではないと思う。だけど思い当たるフシがあるだけに頭から否定はできない。

僕はスペルを一つ一つ切り離して書くのも煩わしかったから筆記体で（しかもかなりくずして）書いてたんだけど、そんな字は僕にしか読めないのかも知れない。
まぁ、ノートなんて自分で読めればいいんだけどさ。

その授業終了後。
「凛子ちゃーん、さっきの英語のノート見せてくんない？」
「あ、ええけど。ミネタクくんには聞いてへんの？」
「えっと……借りたは借りたのよ。でもなんてーか……、個性的、みたいな？」
「個性的？　気になるわ、うちも見たい」
「そこにいるから頼んでみれば？」
「そうやね。……ねぇミネタクくん？　英語のノート見せてくれんか？」
「え、凛子さんも書いてないの？」
「あーいや、そういう事やないねん。確認や、確認」
「ん、わかったよ。……はい」
「おおきになー」
そう言って凛子さんは僕のノートに目を通す。……まさか、ね。
「あ、これ筆記体やね？　しかもかなりくずしてる。これは簡単には読めへんね」
「わかる？　確かに僕以外には読みにくいかも……。でもノートなんて自分で読めればいいんじゃないかな」
「ん～、わからなくもないねんけど……。あ、おおきにな。もうええで。はい」
僕にノートを返すと、小声でみさきさんと話し始めた。
（あれは読めへんわ。確かに個性的やったわ）
（でしょでしょ？　雑ってわけじゃないんだけど……）
（あんだけ慣れた筆記体書けるっちゅーことは、こらミネタクくんそーとー英語の成績ええで！）

（英語はもう大丈夫かな？）
何だろうか。女の子って本当にないしょ話が好きなんだな……。

翌日、僕は昨日思ったことを実行し、家にあったポケットティッシュを3つほどカバンに入れて登校した。
……あの日以来、僕は何か人の役に立ちたいと思うようになっていた。
と、そこに圭輔くんがやってきて僕に声をかけてきた。
「ん？　おぉ、ミネタクじゃないか。おっす！」
「あ、おはよう。今日は早いんですね？」
「日直だしな。ちなみちゃんから言われたんだ、しっかりやり遂げなきゃ男じゃねぇ！」
「そ……そう……」
「つーわけでミネタク、少し手伝ってくれな」
「えっ……、いいけど」
そんなこんなで、今日もまた圭輔くんに振り回される日かもしれない。でも不思議と嫌な気持ちはまったくなかった。

教室に入ると、早速僕らは日直の仕事に取り掛かった。
圭輔くんが職員室に出席簿と今日配る予定のプリント類を取りに行ってる間、僕が黒板を綺麗にする、という分担作業だ。……しかし汚い。
「昨日の日直誰だっけ？　ちゃんと消そうよ……」
あまりの汚さ（と言うより、前日の6時間目の授業内容の板書がそっくりそのまま残ってた）に、つい悪態を吐いてしまう。と、そこに……。
「ただいま……っとっと。ちょっとミネタク、上の方支えてくれないか？」
「あ、大丈夫？　……ずいぶん多いんだね」
「悪いな。よし、置くぞ。……ふぅ」

僕は黒板消しの作業を中断し、圭輔くんが持ってきたプリントの山を支えてやった。……しかし何だこの量は。
「おっ、来月の給食の献立表があるじゃん」
「あ、ホントだ。もう5月なんだね……」
「そーだよな……って、ありゃ？　なぁ、何か同じの2種類ねーか？」
「あ、そうみたいだね。だからこんなに多かったのかな？」
僕らが疑問に感じていると、ドアを開ける音とともに先生が入ってきた。
「あれ、先生？　どうしたんですか？」
「ごめんねー！　私、隣のクラスのプリントまでうちのクラスのところに入れちゃってたみたいなの。多かったでしょ？」
「あ、やっぱり……。重そうでしたよ」
「ホントごめんね！　ごめんね！　今から隣に置いてくるから……」
「あ、いいんですよ先生！　オレ置いてくるから」
「あら……そう？　ごめんね、なんかバタバタしちゃって」
「いえいえー。かわいい先生のためならなんとやら～ってね」
「……ふみゅ？」
「何でもないでっすよ～ん。よっこらせっと」
小柄な体を懸命に使い、余分なプリント類を隣のクラスへ持っていった圭輔くん。
……そこで先生が僕に声をかけてきた。
「ねぇねぇ、今あの子、私のことかわいいって言ったよね？　ね？」
「え……？」
突然、子供のようにはしゃぎながら僕に尋ねてきた。
いきなりの事で驚いた僕は、間抜けな返事を返すことしかできなかった。次の瞬間……。
「ふみゅ～！！　もううれしい～！　ぎゅ～～～～！」
「うむぐぐぐ！？」
ぶはっ、何が起こった！？

突然いろいろなことが起こりすぎて、こちらも対応に困ってしまうが、これはどんなに対応してても動揺してしまうぞ……？
そんな折、圭輔くんが戻ってきてしまった。
僕に抱きつきながら頬ずりをする先生の姿を目の当たりにして、声にならない声を発していた。
僕はそんな哀れな圭輔くんの様子を察して、先生に離れてもらうように促した。
「せ、先生～、離れてくださいよ～」
「はっ、ごめーん！　またやっちゃった……」
ま……また？　この行動は癖なのだろうか？
と思っていた僕の背後に、泣いているのか怒っているのか分からない、複雑な表情を浮かべた圭輔くんがいた。
「ミ～ネ～タ～ク～。なんでお前だけ……？」
「いや……。これは先生の方から……」
「ん？　秋野くんもやってほしいの？」
「え……えっと……」
「んー？」
「やって欲しいです！」
「そう。じゃこっちおいで。はい、がんばりました。ぎゅ～～～～～！」
「う、うおっ！？　こ……この世の天国か……？　はたまた桃源郷か……？　あひ」
「きゃあ！？　だ、大丈夫～？」
「らいじょ～ぶれ～す。うっへへ～、てんごくら～。ふにゃら～」
「ふみゅ～、どーしよー……」
「そのまましばらく待ってれば大丈夫でしょ……多分」
「そう……？　私、悪いことしちゃったのかなぁ……？」
心底幸せそうな表情をしながら倒れてしまった圭輔くんを、僕はゆっくりと起き上がらせる。
そして、制服についてしまったホコリを払ってあげた後、自分の

席へと誘導する。
そんな僕の行動を見ていた先生が、僕に声をかける。
「ずいぶん立ち直ったみたいだね」
「ええ……。おかげさまで」
「今、楽しいでしょ？」
「はい。みんな仲良くしてくれるし……」
「そうでしょ？　……あなたはまだ知らないことが多すぎるわ。もちろん私もだけどね」
先生はそのまま、僕に寄り添うように近寄ってくる。
「教師っていうのは、単に勉強を教えるだけじゃなくてそれ以外、例えば人と人とのつながりとか……そういう事も教えられるのが本当の先生だと思うわけ」
「人と人との……つながり？」
「そう。私なんかまだまだ甘ちゃんだから、みんなから教わることだっていっぱいあるわ。……なーんてね。きゃははっ♪」
教師としての在り方を真面目な顔で語ったかと思えば、いきなり元のあどけなさの残る顔に戻した先生。
その、ころころと変化する表情を見ていると……何故だろう、胸のあたりが締め付けられるように苦しくなってくる。
別にどこも体調は悪くないし、今朝も変なものは食べていない。
じゃ何でだろう……と思っていると、いつの間にか教室内は賑わいを見せていた。
その中に凛子さんの姿もあった。向こうも僕らの姿を確認するなり、こちらに向かってきた。
「ミネタクくんにちなみちゃん、おはよーさん！　なぁなぁ、２人で何話してたん？　あと、圭輔くんはなんで呆けてるの？」
「いや……別に……」
「えっとね、私が嶺山くんにぎゅ～～～～ってしてあげたら、秋野くんもやってほしいって言ったの。それでぎゅ～～～～ってしてあげたら……ああなっちゃったの」

「え？　えぇ？　ぎゅ～～～～って何ですか？　言葉で説明されてもわかんないんで、うちにもやってくれませんか？」
「ん～、あとでね。そろそろ職員室戻らないと」
「そっか。ほなあとでお願いします！」
「うん！　あとでね」
そう言いながら先生は教室を出てゆく。途中ですれ違う生徒に挨拶をしながら。
「……っくしょん！　う～、今日もつらいわ。なぁなぁミネタクくん？　さっきちなみちゃんが言うてた、ぎゅ～～～～ってなぁに？」
「あぁ……、こうやってね……」
「きゃああ！？　何やねん！？」
「む……、凛子ちゃん！？」
……やっちゃった。僕のバカ。
説明するだけなら口頭でもできたのに、何故か再現しようとしてしまった。
いきなり抱きつこうとしたのだ、嫌がったのも無理はない。
でも何でそこで圭輔くんまで来るんだろう？
「てめぇミネタク！　今彼女に何した！」
「いきなり何やのもう！？　抱きつこうとするなんて信じられへんわ！」
「……ごめん。ホントにごめん。僕が悪かった」
どんな理由があったにせよ悪いのは僕だ。ここは誠意を持って謝罪しないと。
「この通り、ホントごめんね！　……ごめん」
「……えぇよ、そないに謝らんでも。まるでこっちが悪うなったみたいやないの。ほら、顔上げーや。……うちかてごめんね、突き飛ばしたりしてしもて……」
「うん……。ホントごめんね？」
「もうええって！　お友達やもん、よー考えたら、ちょっとくらいええわ」

「えっ？　じゃーオレも抱きつか……がっはぁ！？」
「わざとはダメ～！」
興奮（したかどうかは定かではないけど）した圭輔くんが凛子さんに近づいた途端、本場仕込みらしきツッコミが入った。
カバンで頭から殴るのだ、痛くないわけがないだろう。
とそこに、倒れた圭輔くんを踏みつけながらみさきさんが近づいてきた。
「アンタら朝から騒がしいわね～。なーに？　発端はこのバカなの？」
「フ……フフフ……、みさき、何生意気にスパッツなんかはいて来てんだよ。どーせ誰も見……げふぁあ！？」
変なことを口走った圭輔くんを思いっきり踏みつけたみさきさん。彼はその後何もしゃべらなくなった。
「えっと……大丈夫なの？」
「あー、アイツは殺しても死なない奴だから大丈夫よ。それよりミネタク、何があったのよ？」
「えっと……」
「うちから説明したるわ。あのな？　ちなみちゃんが男の子2人にぎゅ～～～～ってしたんやて」
「え！？　ぎゅ～～～～って何？　初めて聞くんだけど」
「ん～……、うちも実際に見たわけやないねんけど、こんな感じやと思うねん。いくよ？　ぎゅ～～～～！」
「わわっ！？　……マジでこんなことしたの！？」
「多分。ね？　ミネタクくん？」
「う……うん……」
「まったくあの先生にも困ったもんよねー。ミネタクはまだしも、この色ボケにそんな事やらかしたらどーなるかわかったもんじゃないわ。ほれ、凛子ちゃんはもう離れる」
抱きついた凛子さんを引き離しつつ、みさきさんが続ける。
「確かにあの人かわいいけどさ、そっろそろ年齢考えなさいっての

よ。いっくら若く見えるっつったって、もう２３かそこらでしょ？
アタシらより１０も上よ？」
「み……みさきさん……」
「ん？　なーに？」
「後ろ……」
「後ろ？　……げ、ちなみちゃん！？　ど……どっから聞いてた？」
「えー？　えっとねぇ～、『まったくあの先生にも～』ってところかな～？」
「な……なんちゅータイミングの悪さ……」
「私ね、今年で２４歳になるの。年女よ。それって……おばさんなのかなぁ？　ふみゅ……」
「そんなことないない！　まだ若いって！」
「うふふ、慰めなんていいのよ。それじゃ、挨拶するから席に戻ってね♪」
（こ……怖い……）
（う～、ちなみちゃんごっつぅキレてるわ。あとで謝ったほうがええで～、みさきちゃん。）
（うわ～ん、アタシ生きて帰れないかも～……）
必要以上に優しい口調で、僕らに席に戻るよう促す先生。
やばい、これはすごく怒ってるよ……。こういう事されると逆に恐ろしいんだよな……。

だけど、みさきさんは何かされることもなく、無事に今日の日を終えていた。
「はぁ～あ、生きた心地しなかったわ」
「お疲れさん……。大変やったね。……でもうちは今日は花粉症つらくなかったで」
「あーら、それはよかったわねー。でもそれがどうかしたの？」
「緊張しとるとそーゆーの出ぇへんのよ」
「……」

そうだったんだ。やっぱりこういうのも気の持ちようなんだな。
……これどうしよう。
「お？　ミネタク、今何しまったんだ？」
「え？　これだけど？」
「ティッシュか。何で？」
「いや……ほら、凛子さんつらそうじゃないですか。だから……」
「なるほど！　お前はいーぃ奴だなぁ！　何だ、渡したいけど何か気恥ずかしくって声かけらんねーってか。よっしゃ、お前の優しさを買って、オレが何とかしてやる！」
「え……？　何するんです？」
「ただ呼ぶだけ、きっかけを作るだけだ。あとはお前次第だ、がんばれよ！　……おーい凛子ちゃん、ちょっといいか？」
「ん？　なーに？」
「ミネタクが話あるんだと」
僕は何を悩んでいるんだ？　何もやましい事をしようとしてるわけじゃない、善意の上での行動だ。友達が困っているのを助けない理由がどこにあろうか。
よし、落ち着いた。声をかけるぞ。
「……っくしょん！　う～……。あ、ごめんな。話ってなーに？」
「あ、えっと……。はい、これ」
「……あー！　ティッシュやんか！　え、もらってええの？」
「うん。何かつらそうだからさ、家から持ってきたんだよ」
「おおきにー！　嬉しいわ～」
喜色満面で僕の施しを受ける凛子さん。
その笑顔……かわいいじゃないか。なんかこんな風に素直に喜んでもらえると……こっちも嬉しくなる。
……そうか、人の役に立つってこういうことなんだな。こんなにすがすがしい気持ちになれるなら……いくらでも引き受けたいな。

家に帰った僕は自分の部屋に戻り、ベッドに横たわる。
仰向けになりながら、見慣れた天井を見る。
……見ようによってはいろいろな形に見えてくる、天井の模様。
今日はどんな風に映るのだろうか。
……。……？
今まで見たことのない物が見える。誰かの顔みたいだ。
……でも輪郭しかわからない。男か女かも……。
いや、性別は分かるな。……女の子だ。
……せめて髪型くらいわかれば誰だかはっきりするのに……。
そこに映るのは……誰？　誰なの？
……僕には分からない。今の僕には……。

雨か。僕は雨の音で目覚めた。
……そう言えば、雨の日だと花粉は飛びにくいんだっけか。
いつの間にかそんな知識が身についてしまっていた。
使い慣れた傘を手に取り、僕は雨の降りしきる外界へと飛び出した。
学校に至る道の信号待ちの時……見慣れた人影（雨のせいで鮮明には見えなかったけど）があったのでそちらのほうに目を向けると、それは凛子さんだった。
近づいて声をかけようとした……が、なぜか声が出なかった。いや、それ以前に足すら動かすことができなかったのだ。
「……んん？　ミネタクくんやん。おはよー」
「お……おはよう……」
僕が戸惑っているところに、彼女の方からやってきた。
僕はその声に驚いてしまい、気の抜けた返事しか返せなかった。
そんな僕の様子を、彼女は鋭く察知したようだ。
「あれ、どないしたん？　元気あらへんみたいやけど？」
（そんなこと……ない）

と言おうとしたものの、やはり声が出ない。
それに……なぜか胸のあたりが締め付けられるような感覚を受けてしまった。
「あ、わかった！　こんな天気だから気が滅入っとるんや！　うちはねー、雨やとええ気分なの～。今の季節だけやけどね」
彼女は何か言ってるみたいだけど、僕には何も聞こえなかった……。
……何をしているんだ僕は。しっかりしないと。
教室に入り、自分の椅子に座りながら始業を待つ。……だけそそのままじっとは待たせてくれなかった。
「ミネタクおはよー！　ねーちょっと聞いてよー！　アタシのバカ弟がさー、もうウザいのよー！　ゲームの相手してやってたんだけどね、負けるとアタシを叩いてくるのよー！？」
相変わらず元気なみさきさんが、僕に不平不満をぶつけてくる。
「ねーさー、最悪だと思わなーい？」
「う……うん」
「でしょでしょー！？　もーアイツったら、今度どんな仕返ししてやろうかしらね」
「し……仕返しって……、穏やかじゃないね」
「あーらそう？　アタシんちだとね、いっつもそれこそ食うか食われるかよ！？　ごはんの時だって、自分のおかずあるのに奪い合いが普通にあるのよ？　もースゴイんだから！」
なんとなく想像できてしまうあたりどうなのだろうか。それにしても、みさきさんには弟がいたんだ。
と、そこに凛子さんが割って入ってくる。
「ねーねー、２人で何の話してるん？　うちも混ぜてーな」
「あー……先生来たよ」
「ホンマや……。ほな、また後でな」
こうして今日も一日が始まる。漠然と過ぎてゆくような日常では

あるが、僕にとっては何もかもが新鮮だ。

その日の帰りもまだ雨は降り続いていた。ひとつため息を交えながら外履きに履き替えていると、階段のほうから圭輔くんがやってきた。

「おぉ、ミネタク！　今帰りか？　いっしょに帰ろうぜ！」

「あ、うん。待ってますよ」

「悪いな。……んしょっと。よっし、行こうか」

圭輔くんと連れ立って外に出る。……すると、不意に向こうから話題を振ってきた。

「お前さ、好きな娘できたか？」

「……えっ！？」

「まぁ、いきなりじゃそんな反応されても仕方ないわな。……実はオレ、まだそんな『好き』とかって明瞭な言葉にはできないんだけど、気になる人がいるんだ」

「えっ……、誰なんですか？」

「知りたいか？」

「そりゃ……まぁ」

「じゃあお前から言え。隠すなよ、お前にもいるんだろ？」

「う……」

「……わかった。やっぱいいや。オレから言うから、お前も言うんだぞ！？　……オレな、先生がちょっと気になってるんだ」

「先生って……霧原先生？」

「そう、ちなみちゃんだ。……ほら、お前も言えよ。隠したって無駄だぞ？　オレ、ある程度わかってるんだからな。思い違いかもしれないけど……」

「えっ……？」

「大体な、視線とかでわかっちまうんだよ。この娘だけには違う視線を向けてる、ってな」

「……」

「っかぁ～、ここまで言っても言えないか？　ったくお前はしょーがねーな。オレが代わりに言ってやるよ！　……お前さ、ぶっちゃけ凛子ちゃんにだけ違う視線向けてるだろ？」
「うっ……そ、そうなのかも……」
「図星なのか。まぁ、だからってオレが何するわけでもねーから安心しな」
言い当てられた。……言われてから気づく事というものもあるのだな。
確かに僕は、凛子さんをある意味違う目で見ているのかも知れない。
だが何故そうしてしまうのかが、自分でも分かっていない。
「あの娘はかわいいな、確かに。みさきの１００倍はかわいい。話しやすい感じだし、よく笑うし、女の子としては最高かも知れねぇ」
「やっぱり……同じこと思ってるんですね。僕も……彼女に対してはそう思ってる……」
「そうかそうか。……だが！　オレはあの時先生にぎゅ～～～～ってしてもらってから何かが目覚めた！　いいか、今からそれを語るぞ」
ここまで真剣な顔をしながら話をしていた圭輔くんが突如として破顔し、熱く語り始めた。
「オレに足りなかったのは！　オホーツク海よりも広い優しさで包み込んでくれる、愛だ！　ちなみちゃんともっと仲良くなれば、またぎゅ～～～～ってしてもらえるかも知れねぇ！」
両手を広げ、芝居がかった口調で語り始める圭輔くん。僕はその姿にしばし見とれていた。
「オレはその為に！　今度開かれるであろう生徒会の選挙においてだな、会長に立候補してやる！　落ちてもいい。参加することに意義があるのだ！　うわっははははぁ！！」
「す……すごい決意だ……」
「ミネタク、恥ずかしがることはないぞ。人を好きになるって事に

は、どこにも落ち度はないんだ。恥ずべき事じゃないんだ」
「そ、それはわかってますけど……」
「もちろん場をわきまえたりとか、相手のことを考えることは必要だが、好きになることだけなら自由なんだよ」
好きになることだけなら……自由？
「実らなくたっていいよ。人間ってのは、そういう事も体験しないと成長できないんだからさ。ま、体験してそれを自分の糧にできないようじゃ、そいつはそれまでの人間ってこった」
圭輔くんは虚空を見上げ、たそがれながら言った。
「失敗をいつまでも悔やんで前に進もうとしない奴なんかには、成長する権利ってか必要なんてないとオレは考えるね」
「……」
「実際、オレがいっくらちなみちゃんを好きになろうが、あの人はオレと付き合う気持ちなんかかけらもないだろうよ。考えてもみろ、中学生と教師だぜ？　犯罪じゃねーか」
「う～ん……それ言ったらおしまいじゃないですか」
「だよなだよな。でも、世間的にはそうなっちまうんだ。それでも男ってのは好きになった人には熱が入れられるんだ！」
「それは圭輔くんも？」
「あたりめーだろ。いつもはお調子者でフラフラしてるようなオレだけど、こういう事に関しては自分でもすっげぇまっすぐな奴だなって思ってるんだから」
「そういうのって自分で言っても説得力ない気がするんだけど」
「うっせーな。わかるだろ？　決めるところだけはビシっと決めたいわけじゃん。ミネタクもそうだろ？」
「そう……ですね……」
今……確信した。圭輔くんはただのお調子者なんかじゃない。
どんな事にも全力投球で取り組もうとしている、見習うべき人間だ。
それに引き換え僕は何だ。また逃げているではないか。もう逃げ

ちゃダメだ。
今までのこと……、そして、これからのことを糧にして、成長していかないと……、いつまでも、あのままだ。

第3章：このまま

月日は流れ、2年生になって初めての定期テストが行われようとしていた。
僕たちはそれに備えるという意味で、集まって勉強する事にした。お互いにわからない所を教えあうという方法だ。ちなみに場所は学校の図書室。
いつかに行った駄菓子屋も候補に上がったけれど『ばーちゃんに迷惑がかかる、学校じゃないとやる気が出ない』等の理由からここに落ち着いた。

「ここでやってるオレらは勝ち組だな。あそこでもよかったんだけどさ、脱線しちまいそうだし」
「そーよね。あんまり長く居座っちゃうとおばーちゃんに迷惑だしね」
「でもよかったわ～。みんなと勉強できて。うちいっつも一人でやってたんよ、前の学校でね。それはそれで集中できたからよかってんけど、やっぱりこんな風にみんなで教えあいながら出来るのってええよね～」
「うん。……分からないところあるかもしれないから、その時は教えてね？」
「うちもお願いするね～」

……っと、そんな感じで和気藹々と勉強を進めていた。でも僕は、終始驚きの連続だった気がする。
まずは凛子さん。彼女はとにかく覚えるのが早い！　ちょっと読んだだけでもう完全に暗記してる気がする。
それと、圭輔くんも凄い。何が凄いって、勉強してる時の集中力が尋常じゃない。まるでこっちにも伝わってくるかのようだ。

僕が感心しながら見ていると、唐突にみさきさんが話しかけてきた。
「ねぇミネタク、そう言やアンタって成績どんくらいだったのよ？」
「え？　1年のときでいいんでしょ？　確か……一番いい時で学年25位だったっけ」
「あ、そう。アタシ一番悪い時で21位だったわ」
「……」
「あ、ごっめーん。そーゆーつもりじゃないのよ？　圭輔ね、すごいのよ。2位とか3位とかばっかりよ。1回だけ1位も取っちゃったし……」
「す……すっごいね……」
「ん、なに？　オレの話？」
「そーそー。またいっちゃうんじゃないのぉ？」
「いければいきてーもんだぜ。もう二度とあんなクソみてーな疑いかけられたくねーからさ……」
「あぁ、アレね。……もう忘れなさいよ、あれはアンタ自身が濡れ衣だって証明したじゃないのよ」
そう言うなり2人はため息をつきながらうつむいてしまった。どうやらあまり触れてほしくない話題のようだ。
「なんか……ごめん」
「え？　なんでアンタが謝るのよ？」
「いや……思い出したくなかった事を思い出させちゃったみたいだから……」
「大丈夫大丈夫、もう忘れる事にしたよ。……思い出したくない過去は、思い切って完全に断ち切っちまうのも悪くないからさ」
思い出したくない過去は……思い切って完全に断ち切るのも悪くない……？
理屈は分かる。だけど、断ち切ってしまったら……忘れてしまったら……その出来事から生じた糧にすべき事柄も捨て去ってしまうのではないだろうか……？

「……あれれ？　ちょっとー、みんなどないしたん？　早よやろーよ？」
「あっとっと、わりーわりー。じゃー次は数学いってみっか？」
「うんっ！　うち、問題集やるね！」
「……アタシらはアタシらのペースでやろっか、ミネタク？」
「う、うん……」
　こんな調子で、何だかんだで結局完全下校時刻の６時まで居座っていた僕らは、司書の先生に注意されて慌てて勉強を切り上げた。

「あっちゃ～、もうこんな時間じゃん。凛子ちゃん、大丈夫？」
「あー……ちょっとだけキツイかもやわ」
「そっか……。ごめんなー、こんな時間までつき合わせちまって。……もう帰ったほうがいいな。ほら、オレらの事はいいから先帰りな」
「おおきにー、みんな。ほなお先に～！　明日がんばろーねっ！」
　凛子さんには門限があるので、僕たちより先に帰っていった。
　彼女を見送る僕の手は……知らないうちに動いていた。気付かないうちに手を振っていたようだ。
　圭輔くんとみさきさん、２人に気付かれなかっただけよかったのかも……。

　家に帰った僕は、今日やった勉強の内容を忘れないために机に向かった。明日は社会・数学・国語だ。
　社会は歴史・地理で５０点ずつの配点で１００点満点。だから実質４教科になるわけだな。
　数学はそんなに難しくないから公式を覚えておくだけで何とかなりそうだけど……問題は国語。
　自分の国の言葉なのに、難しい。作者の気持ちだの、書いた本人にしかわからないようなことをどうしてこちらが考えねばならないのだ。

しかしそんな教科は、霧原先生の担当。
ならば、先生のためにもちょっとがんばってみようかな。あの人には恩もあるし、何より……。
何より、何だ？　何があるんだ？　『恩がある』事の他に、僕が先生の為に何かしようと思えること……。
それを考えていると、何故だか激しく胸が締め付けられるように痛んでくる。
それは以前、雨の降る朝に通学路で凛子さんに出会った時と同じような……、苦しいけれど、どこか心地よい感触。これは……何だ？
「……ちなみ……先生……」
僕は不意に先生の名を呟いていた。しかも下の名前で。
彼女の虚像を、年上ながらあどけなさ、可愛らしさの残る彼女を思い浮かべる。
……そんな僕が次に取った行動は、机の引き出しの捜索（というほど大袈裟ではないが）。
クラスの集合写真が入っているはずだ。ついこないだもらったものだからここに入ってるはずだ……。あ、あった、これだ。
そこには……、穏やかな笑みを浮かべたちなみ先生が中央に写っていた。この映像を……、僕の２つの目に焼き付けたい。そしてこのまま……ずっと……。
……このまま、何だ？
ふと我に返って時計を見ると……、いつのまにか日付が変わっていた。僕は慌てて机の上の余計なものを片付けた。
……でもこれだけは片付けられなかった。ちなみ先生の写真、もといクラスの集合写真。
仕方が無いのでその辺の本で支えをして、簡単な写真たてをこしらえてみた。
これでちなみ先生に見守られながら勉強ができ……って、何でこんな事考えているんだ僕は。集中しないと……。

翌日……。
「……ふぅ」
初日のテストを終え、僕は安堵のため息をついた。ここでは敢えて結果は考えないが、まぁこんなものであろう……。
と、そこにいつもより嬉しそうなみさきさんがやって来て、唐突に僕に話しかけてきた。
「ハーイ、ミネタク！　お疲れさーん！！　ねーねー、アンタはどーだった？　どーだった？」
「いや……。どうって言われても……。普通に、無難に」
「なによー、素っ気ないわねー。アタシはねー、空欄が一つもなかったのよ～！！　も～嬉しすぎ～！！　きゃー！　きゃーー！！」
「う……」
僕は……、数学の最後の文章題だけはいくら考えても出てこなかったし、歴史・地理もいくつか書けなかった所があった。その意味ではみさきさんは頑張ったんだな……。
あ、国語は一応全部書けたはず。
……とそこに、世界中の不幸を背負ったかのような顔をした凛子さんが来た。
「……ふぇ～ん。イヤやわ～もう……。ありえへんもん～……」
おぼつかない足取りでこちらに向かってくる凛子さんを、どこからともなく現れた圭輔君が支えるように受け止めると、やや芝居がかった口調で呟いた。
「……キミにそんな顔は似合わないよ。さぁ、元気を出しておくれ。そしてボクに太陽のような笑顔を振りまいておくれよぉ」
「……そんなこと言うたかて、うちの点数が上がるわけやないもん」
「ごもっとも……」
「アンタってさ、ホントこーゆー事に関してはバカよね。クサいってか、アンタいつの時代の人間よ？　今どき、どんなナルシストでもそんな言い回し使わないわよ？」
「……ところでさ、何でそんなに落ち込んでるの？　やっぱりテス

トが思わしくなかったから？」
「うん……。あのね……、地理の方でね、回答を一つずつずらしちゃったの……。それがなかったら満点やったんよ？　……うちってホンマもんのアホンダラやわ……。はぁ～あ……」
　彼女の目にはうっすらと涙が浮かんでいた。よほどショックだったのだろう……。
「……ま、まぁ、まだ始まったばっかじゃん？　それに、それやっちゃったのって地理だけでしょ？　大丈夫だって！　……ほーら、泣かないの！　たかがテストじゃん、これで人生が全て決まったわけじゃないんだからさー、元気出しなって！」
「うん……。おおきに、みさきちゃん」
　みさきさんに肩を抱かれながら頷く凛子さん。まだ少し目がうるんではいたけど、笑顔もこぼれていた。
　それにしても、人懐っこそうなあの顔……かわいいな。
　そこにちなみ先生が戻ってきた。教卓の方に向かう彼女を、僕の目線は追いかけていた。写真とは違い、目の前の彼女は実際に動いている。
「えっと……、今日はみんなお疲れ様！　私の作ったテスト、どうだった？そんなに難しくは作ってないんだけどな」
「はいはーい、アタシは一応全部埋めましたー。それはそうとちなみちゃん、アレって全部手書きだったじゃん？」
　みさきさんが先生に質問する。そういえば……国語のテストは何から何まで手書きだったっけ。問題の文章も解答欄の四角も。さすがに教科書の本文はコピーだったけど……。
「うん、手書きよ。私、国語の先生だからさ、いつでも文字を書こうって思ってるのよ」
　殊勝な心がけだと思った。国語の先生だからと言って、全ての先生が手書きでテスト用紙を作っているわけではないのに。
「それとね……、私が高校生の時なんだけど、現国のテストが全部手書きでね。なんて言うか……、そういうの見てると、心がほんわ

かあたたかになるみたいな……」
「あー、わかる！　教科書本文はコピーだったけど、それ見た後手書きの文字見ると落ち着けたみたいな」
「今ってさ、もうワープロとかで作るのが主流なのよ。だけど私は、だからこそ敢えて手書きにしてみたの。……授業の中だけじゃないぞ、勉強する事は」
（それって、ちなみちゃんがワープロ使えへんからとちゃうんかいな）
　凛子さんが小声で何か言ったが、聞こえてなくてよかったと思った。
「日本語が本来持ってる真髄みたいなものを、私の字で感じてくれたら、教師冥利に尽きるわ。せっかく日本人として生まれたんだからさ、自分の国の言葉を大切にしていこっ、ね？」
「……うっわ～、ちなみちゃんがまともな事言ってる……。さすが先生ね、見直したわ」
「何よー、見直したって。あー、もしかしてあなた、私のこと今まで先生として見てなかったでしょー？　よし、原田さんは国語の成績1っと……」
「あーあー、待って待って！　そーじゃなくてアレよアレ。今までそう見てたわけじゃなくて、先生として見た上で凄いって思ったのよー」
「きゃははっ、ジョーダンよぉ。しどろもどろになっちゃってか～わいい～！」
「……」
「それじゃ今日はこれでおしまいね。みんな！あと2教科よ。気を抜かずに頑張ってね！きりーつ！」
　先生の号令と共に今日の授業（？）が終わる。生徒達はそれぞれの行動を取り始めた。僕らといえば……。
「やっぱ今日も図書室で勉強か？」

「う～ん……。昼食べてないじゃん。お腹すいちゃったわよ。一回帰ってどっか違うところでやんない？」
「それもそうだな。んじゃ1時だ。1時に図書室じゃなくて図書館で集まってやろうぜ」
「はーい。ほな、またあとでなーみんな」
僕らもそれぞれの帰途についた。

そして1時ちょっと前。僕は明日のテストの教科の準備をして図書館へと向かう。僕の家からは歩いても5分くらいしかかからない場所だ。
その図書館は、同じ敷地内に公園もある。今の時間帯は、小さな子供が母親に手を引かれて遊んでいるのをよく見かける。
……僕にもこんな無邪気なころがあったのかと思うと懐かしい。
そんな僕の肩を叩く人がいた。……凛子さんだった。
「さっきぶりやね、ミネタクくん！　ねーねー、何見てたん？」
「何見てたかって？　あぁ、子供たちを見てたんだ」
「げ、ま、まさかミネタクくん、ろりこん？」
「ち、違うよ！　そんな気持ちで見てたんじゃないってば。なんだか微笑ましいな～って」
「なんや、そんならそうって言うてくれたらええのに。でも、子供ってかわいいよね～。……うちも、子供欲しいわぁ……」
「……え？」
彼女は何気なく言ったつもりだろうが……、僕にはそうは聞こえなかった。
「そ……それって……、ど、どういうこと……なのかな……？」
おそるおそる聞いてみると……、彼女は至って平素に返してきた。
「え？　どこもおかしいとこなんかないわよ？　ほら、そろそろ中に入っとこ？」
「あぁ……、そうだね……」
そう言いながら、凛子さんは僕の手を引く。期せずして、彼女と

手をつなぐことになってしまった。
僕の手に伝わる彼女の温もり。それはまだ小さく、僕の手を全て包み込むにはやや不足気味である。
しかしながらこの時、このつながりは……、そう簡単には千切れないような、そんなように思えた……。

「ここでいい？　４人分確保しとかんとね」
「そう……だね……」
どこの図書館にも設置されているであろう談話室。そこの４人がけの席を確保した僕と凛子さんは、ひとまず座って残りの２人の到着を待った。
「……って、ここで待っててもしゃーないやん。迎えに行く人がおらんと……」
「あ、じゃあ僕が行ってくるよ。凛子さんはそこで待ってて」
「あ、そう？　うちが行ってもよかったんやけど……。ほなお願いね！」
「うん、荷物見ててね？」
「はーい」
彼女を残し、僕は２人を探しに外に出る。すると……すぐに見つかった。
「あっ、こっちこっち！」
「おぉ、そこにいたのかよお前！　探したじゃねーか」
「ごめんごめん、場所取ってたからさ」
「やるじゃんミネタク！　じゃ行きましょ？」
２人を連れて談話室に戻る。
「こんにちはー！　それじゃ早速始める？」
「そうだね、やっちゃおうか」
それから間髪入れずに静かに勉強を始める。……静寂の部屋の中、響き渡るはペンを走らせる音、そして本のページをめくる音のみ。
もちろん僕もその音を……発していない。手が動かせない……。

理由は、考えられる事としては一つ。隣に座っている女の子の存在だ。
問題集に取り組んでいる凛子さんの姿が、たまらなく可愛らしく見える。
時折、わからない問題に遭遇したのか、頭にペンを押し付けながら悩む姿も見受けられた。
ともかく、彼女の一挙手一投足を、僕は勉強そっちのけで見ていたかもしれない。このままずっと……彼女を見ていたい……。
しかし、一つわからない点がある。これが……真向かいに座っているみさきさん相手だとそんな感情が全く湧いてこない。2人とも異性である事は確かで、同じクラスで席も隣り。
僕は勝手にこう結論付けた。僕が凛子さんに向ける感情と、みさきさんに向ける感情は全く別のものだ、と。
……そろそろ本題に戻らないと、今日こうしてここに来た意味がない。勉強しないと。
気がつくと、またも時間がちょっと凄い事になっている。夕方の5時をまわっており、時々見受けられた子供たちの数もまばらになっていた。
そして……、誰からともなく出た言葉で、皆が一斉に我に返る。
「なぁ、今何時かわかる？」
「……はっ、そうや。今何時かなぁ……？　みさきちゃん、時計持ってへん？」
「持ってないわ、ゴメン。そこらへんにない？」
「えっと……、あ、あそこにあるね。……5時過ぎだね、今」
「マジで？　もうそんな時間になっちゃった？　やっぱ集中してると気付かないものよねー」
「そやね～。……なんかうち、やってて楽しかったわ～。こんなに楽しく出来たの初めてよ、ありがとっ！」
凛子さんが僕らに向かってお礼をする。……吸い込まれるかのようなその笑顔に、僕はしばし見とれてしまっていた。

「な……なによいきなりー？　お、お礼なんか言われるような事した覚えないわよー？」
「えー？　だって……嬉しかってん……。なんか知らんけどすっごく嬉しくて……。うぅ……」
「わっわっ、ちょ、ちょっと何で泣くのよ！？　どどどどーしたの？」
「わかんない～……けど嬉しいの～……。こんな風にみんなで勉強とかした事……なかったもん……」
そういえば……、彼女は前の学校であまり友達もいなくて、ずっと独りで過ごしてきたって聞いた覚えがある。
恐らく転校も、そういった点を少しは考慮したのだろう。新しい環境で彼女に友達が出来るように……と。
そう考えると、いつの日か彼女の母親が僕らを見るなりあんなに感謝の気持ちを表していたのも頷けるな。
あどけない笑顔の裏に隠された、辛く切ない過去。
彼女はずっとそれを抱えながら過ごしていた。だけど僕らにはそんな一面を垣間見せる事もなく。
「いいんだよ、甘えたって……」
不意に口をついて出たそんな言葉。正直、僕は何を言っているのかわからなかった。だけど、どうしても言いたかったその言葉。
「凛子さんは……、もう独りじゃないんだから……。もう無視するような奴はいないんだから……。みんな凛子さんの味方なんだから……」
「そ……、そうだぜ凛子ちゃん！　オレらがいるじゃんか！」
「そーよ！　アタシらでよければいつだって付き合ってあげるよ！　勉強だけじゃなくて遊びも！　……たまにはいっぱい泣いちゃおうか。おいで、アタシに泣きついてきていいよ……」
「うん……！　みんな、大好きよ……！」
みさきさんに抱かれながら泣き崩れてしまった凛子さん。
気丈な彼女が、初めて感情を露わにして見せた。

……いや、気丈だったのも違う一面だったのかも知れない。
内面は本当はすごく繊細で、傷つきやすいのかも知れない……。

家に帰ったが……、どうにも勉強をする気にはなれなかった。
……やる気が出ないなら、無理にやるよりも思い切ってやらない方がいいとどこかで聞いたので、今日はこのまま寝る事にした。
明日はテスト最終日だ、大丈夫かな……。

最後のチャイムが鳴り響き、2年生初となるテストは終わりを告げた。まぁ、あれだけ出来ていれば大丈夫だろう。
他のみんなも、今日は目立ったミスはなさそうだった。
程なくして先生が戻ってきて、帰りの号令をかける。……今週はこれで終わりだ。どっと疲れた気がする……。早く帰ってゆっくり休むか。
……しかし、そうさせてくれないのが隣の女の子。帰ろうとカバンを持って立ち上がったところで声をかけてきた。
「なぁ……ミネタクくん？　今日ってさ……、これからなんか用事とかある？」
「特にはないけど……」
「ホンマに！？　あっと……、えっと……、う、うちに来ない？」
「えっと……ごめん、用はないけど今日は帰りたいんだ」
「えっ……！？　……そっか、残念やけど仕方ないね。……バイバイ」
「うん、またね。それじゃ」
そういい残して、教室を後にする。……なんだろう、どこか彼女の表情がいつもと違ってたような……。気のせいかな？

最近は本当に天気が優れない。連日の雨で、気分も滅入る。雨音が目覚まし代わりになることもしばしばあった。

いつものように早めに学校に着いてしまう。そこから、始業まで待つのもいつもの通り。
しかし、そこから先が普段とは違っていた。席替えしたので僕らの席は変わったが、僕と凛子さんとはまた隣同士になっていた。
その凛子さんが、予鈴が鳴っても姿を現さないのだ。どうしたんだろう……。
その日の放課後、僕は先生に呼び止められた。
「ちょっといい？　あのね、凛子ちゃんの事なんだけど……」
「あぁ、はい」
「今日あの子休んだわよね？　だからさ、あの子のおうちまでこれ持ってってくれないかなぁ？」
そう言うと同時に、後ろ手に持っていたものを僕の目の前に持ってくる。
「本当なら私が直接行った方がいいんだけどね、ちょっと行事とかの準備で立て込んじゃって行けないのよ。ね、お願いできるかなぁ？」
「大丈夫ですよ」
「ありがと～。いい子ね、もうっ。頭なでなでしてあげちゃう♪」
「わっ、やめてくださいよ～」
「うふふっ、照れちゃってかわいいんだ～。それじゃこれ、お願いね」
僕は先生からプリント類を受け取った……その時に不意に先生の手まで触れてしまった。そして、何故か反射的に手を離していた。
「あっ……。ご、ごめんなさい……」
「もう、何やってんのよ。ほら」
今度こそちゃんと受け取る。……不意に起こったことだとしても、僕は確かにちなみ先生の手に触れる事ができた……。
降りしきる雨の中、僕は凛子さんの家まで歩いていた。過去に何度か行っているので、道は覚えている。

ドアの前に立ち、インターホンを鳴らす。すると、程なくしてドアが開け放たれた。
「あ、こんにちは。……えっと、これ、届けに来ました」
「あらまぁ～、雨の中ご苦労さんでしたねぇ～。ほら、上がってってください」
「あ、結構です。大丈夫です」
「そんな遠慮せんといてくださいよ。凛子のお友達なら大歓迎やわ」
「そ……そうですか？　では、お邪魔します」
「いらっしゃいませ、どうぞごゆっくりしていってくださいね。凛子ー！　お友達来たでー！」
おばさんは半ば強引に僕を家に招待すると、すぐさま凛子さんを呼んでいた。寝てなくて大丈夫なのかな……？
上から降りてきたのは、パジャマ姿の凛子さんだった。いつも制服で見慣れているので、どこか別人のように感じてしまった。
「わぁ、ミネタクくんやないの！　どないしたん？」
「いや、凛子さん今日休んだでしょ？　だから今日配られた手紙とか持ってきたんだよ。それより、寝てなくて大丈夫なの？」
「平気よ。ちょっと喉痛かっただけやし……けほっ」
「わっ、大丈夫？　無理しちゃダメだよ」
「おおきに。でもホンマ大丈夫やからね？　……って、うちこんなカッコやったわ！　いやや～、恥ずかしいよ～」
「ええやないの別に。せっかくこうして来てくれはったんやからそんな事言わないの」
「そんな事言うたかて……、恥ずかしいもんは恥ずかしいもん……。ミネタクくんには見られたくなかったんよ……」
「僕は……構わないよ。それでも。こんな事言ったらおかしいかも知れないけど、似合ってるよ、それ」
「ホンマに！？　嬉しいわ～。あ、ちょっと待っててね、お菓子持ってくるから」
そう言いながら立ち上がると、戸棚の中を物色する凛子さん。本

当に何もしてくれなくていいのに……。

凛子さんの家から帰る途中、ふと物思いに耽ってみた。

ここ最近の僕は『自分から動いて』いないように思える。何をするにも受身だった。

もう忘れていなければいけないが、あの時の僕の方が、まだ自分から動けていた点で着目すれば優れていたと言えよう。

……でも、何をしていいかが分からない。このまま、何も変化を求めずにのうのうと過ごす方がいいのか、それとも何か動いてみて現状を打破した方がいいのか。

自分でもどっちの方がよいか、それくらいは分かっている。でも……、一歩を踏み出す勇気がない。

それに、まだ自分の中で明確な答えも出ていない。

分かっているつもりで分かっていない。そんなわけの分からない状況が続く……。

今日は、どんな夢を見るんだろうか。

第４章：知ってしまった真実

月日は流れ、夏休み。
クラブ活動をしていない僕にとっては、文字通りの休みとなった。意外と、僕の周りのみんなは部活をやっており、なかなか予定を合わせられなかった。
そんなある日、近所の商店街で夏祭りが行われていたので行ってみた。……凄い人の数だ。この辺の人を全部ここに集結させたようだった。
夜店をいろいろと見回してみる。……やっぱり食べ物系の店が多いね。
こういう場で食べると、余計に美味しく感じてしまうのは僕だけではないだろう。
まぁ、こういう場でないと食べる機会が少ない、という理由もあるんだろうけど。
……そんな折、とある露店に目が止まる。そこは、夏祭りの定番ともいえる、あんず飴のお店だった。実は僕もこれが結構好きだったりするので、ついつい目を向けてしまうのだ。
するとそこにはよく見知った人がいた。ちなみ先生だ。
こんな所で会えるなんて、今日はついてるかも？　と言うことで声をかけてみた。
「あ……あの……、先生？」
「ふみゅ？　……あっ、嶺山くん！　久しぶりー！　元気してたぁ？」
「えぇ、おかげさまで。先生こそお元気そうで」
「それがそうでもないのよー。ちょっと夏バテ気味で～……」
「そう……、ですか……。あ、先生もお祭りとかって好きなんですか？」
「そうね、好きって言われれば好きかな。でも、今日は遊びできた

わけじゃないの。ほら、夏休みっていろいろなことやるじゃん。非行防止って事で見回りすることになってるのよ。気づかなかったかも知れないけど、他の先生方とかＰＴＡの皆さんもいるわよ。だからね、あんまり夜遅くの外出はダメよ？」
「はい、わかってますよ。そんな遅くまでいるつもりもないし……。あ、でも、見回り中なのにお店にいてもいいんですか？」
「う……。ホントはダメなんだけど……。せっかくのお祭りだし、その……。あうあう……」
「だ、大丈夫ですよ。告げ口なんかしませんから」
「わーい！　ありがとっ♪　ぎゅ～～～～！」
「わっ、ちょっと先生～。後ろ並んでますけどいいんですか？」
「あ、ごっめーん……。おじさん、１回ね！」
先生は店の人にお金を渡す。すると、傍らの機械のランプが点滅を始めた。
それには２０のランプがあり、それぞれのランプの下方に数字が書かれている。
どうやら、光の止まった場所に書かれている数字の分だけもらえるというもののようだ。
先生は次々と変わるランプを必死に目で追っている……かどうかは定かではなかったが、なかなかボタンを押そうとはしない。
……数秒後、走り続けるランプが止まる。そこに書かれていた数字は……２。
「お、お嬢ちゃんよかったねー。２本当たりだ。さ、どれがいい？」
大きな氷の上には様々な飴が乗っていた。この中から２本選んでいいのだ。
「２本か～。１本ずつ分けよっか？」
「えっ……いいんですか？」
「いいわよいいわよ。口止め料ってことにしといて」
「は……はぁ……」
「はいっ、決まりぃ♪　それじゃ、先に選んでいいわよ」

じゃ……これでいいや。僕は無難に普通のものを選んだ。
先生も好きなものを取り、店を後にする。
「これからどうするの？」
「あ、もうそろそろ帰りますよ。一通り見れたし、それに……」
「それに？」
（あなたに……、出会えたから……）
とは、心の中で思っただけ。実際に口には出していない。言った所で……どうしようもないから……。
「ね～ぇ？　それに、のあとなんなのぉ？　教えて教えて～」
それでもしつこく聞いてくる先生。この姿も……とても愛らしい……。適当にはぐらかしておこう……。
「……それに、あんまり遅くなったら先生に迷惑かけますからね」
「そっか～。それじゃまたね。ちゃんと宿題やるんだぞ？」
「わかってますよ。それではまた新学期に……」
そこで先生に別れを告げる。
やっぱり先生は……かわいらしい。凛子さんとはまた違った可愛さがある。
いつまでもあなたを……見ていたい。

長かった夏休みも終わり、いよいよ新学期……と思ったらすぐ、中学校生活最大のイベントとも言える修学旅行……いや、移動教室が始まった。
3泊4日と、僕にとっては未体験の日数だ。まぁ、修学旅行じゃないのでほとんどが遊びのようなものだけど……。
でも来年に行われるであろう修学旅行も同じようなものか。実際、本当に勉強目的で望む者などほんの一握りしかいないだろう。
僕らの班は、いつものメンバーに2人加えた6人班。その班長は、何故か僕になっていた。まぁ、ジャンケンで負けたから文句は言えないんだけど……。

そして当日。
朝早い集合なのは別に構わない。僕は朝方人間なので早起きには慣れてるけど……集合時間直前でも全員集まってないのはどうして！？
遅刻したら問答無用で置いていかれるのに……。
……いくら待っても、あと2人来ない。みんなも不満を口にし始めた。
「オイオイ、どう言うこったよ！？　なんで来ねーの！？」
「僕に言われても……。もしかしたら体調崩しちゃったのかも知れないし……」
「でもさー、だったら連絡くらい入れるのが普通ってモンじゃん？　社会のジョーシキってやつよ。ほら、こーやってみんなが迷惑してんだし」
「……ちょっと先生に聞いてみた方がええんちゃうのん？　ちなみちゃんちょっと抜けとるとこあるから、連絡あってもうちらに言うの忘れてるともわからんわけやし……」
「そうかも……じゃ聞いてく……って、先生」
「聞～こ～え～た～わ～よ～。凛子ちゃんあなたねー、壁に耳あり障子に目ありよ。……でも、言う通りなのよね。昨日からあの子達休んでたじゃん。今日になっても体調戻らないみたいって連絡あったのよ、さっき。あなたたちに言うのすっかり忘れちゃった～、ごめんね～」
「ふわ～、2人とも休みなん？こんな日に体調崩しとるなんてタイミング最悪やね」
「そ……そうだ……ね……。でも本当は行きたかったと思うよ」
「だったらよー、オレらがあいつらの分まで楽しんでくりゃいいんだよ。で、ついでに帰ってきたら出た課題を見せてやるとか……。もちろんあとで御礼はいただくけどな」
「こーら！いぢわるしないでちゃんと見せてあげなさい！……あ、時間ね。そろそろ並んでね」

指示を受け、僕らの班（結局４人になってしまった）も並ぶ。……これから４日間という長い旅が始まるが、そこでは何が待ち受けるのだろうか……。

１日目のスケジュールを一通りこなし、就寝時間となった。
……でもみんなはこれからが本番とばかりに目を輝かせている。
そして直後に、誰からともなく声がした。
「やっぱお泊まりっつったらこれだろー？　……暴露タイム！」
「おー、いいねー。誰から行く？　てか何暴露すんだよ？」
「誰でもいいって、言いてー奴からで。ネタは決まってるだろ？女子についてだよ！」
「女子……。てかさ、うちのクラス可愛い子いなくね？」
「はぁ？　てめーの目は節穴か？　柚月さんとかいるじゃねーか！転校生ってところがポイント高いと思うわけよ。どうよ？」
「わかるわかる。なぁ秋野、お前ら柚月さんとよく話してるじゃんか。あの子、好きな奴とかいるって言ってた？」
「ん？　いないんじゃね？」
「え……？」
凛子さんは好きな人……いない？　いないんだ……。よかったのか……どうなのか……。と、その時だった。
（よぉミネタク、お前も参加しろや。寝てねーんだろ？）
（いや……、いいよ……。明日早いし……）
（そっか。まぁ、無理強いはさせないよ。……でもな、今の会話の流れでわかったろ？　凛子ちゃんの事かわいいな～とかいいな～とか思ってるのはお前だけじゃねーんだ。そこは肝に銘じとけよ、な？）
圭輔くんはそれだけ言って、再び会話に加わっていった。僕は参加はしなかったものの、気になったので話だけは聞いていた。
「お、いねーのか！？　そりゃいいや、いつか遊びに誘ってみよっかな～」

「いきなり二人っきりはむずくね？　誘う時はオレもな！」
……しかし、外に声が漏れていたのか、不意に部屋のドアが開け放たれた。
「こらー！　消灯時間だから寝なきゃダメでしょー！？」
「……」
当然、返事はない。ドアを開けてから注意されるまでの時間で寝に入れるはずはないので、みんな狸寝入りをしているのだ。
「……ねぇねぇ？　どんな話してたの？　私にも教えて欲しいな～……なんてぇ。えへへ」
「……」
「ふみゅ～、残念……。知りたかったんだけどなぁ……。じゃあお休みね。ばいばい」
ゆっくりとドアを閉めるちなみ先生（だと思う）。完全に居なくなったと思われてから、また小声の会話が始まった。
「行ったよな？」
「行った行った。てか、今来たの誰？」
「先生だろ。霧原先生」
「そういえば、うちらの先生も結構かわいくね？　いくつだっけ」
「さぁ？　でも確か25かそこらだとか言ってたような……」
「25かぁ……。ちょうど一回りくらい違うのか。ちょっと上過ぎるかねぇ」
「全然アリだと思うぜ。ぶっちゃけオレだって狙ってたりするんだけど」
「なにぃ！？　秋野、てめーも先生の事がっ！？」
「ずりーぞ抜け駆けは！」
「抜け駆けってなんだよ、オレはんな事した覚えねーぞ。……どうでもいいけどなお前ら、冗談とかでそういう事ほざくのやめような」
「な、なんだよいきなり……」
「オレは……たとえ想いが届かなかろうとも、それでもいいんだ。オレは、だからこそさっきみたいなこと言ったんだ。わかるかお前

らに？」
「わかるかって言われても……」
「年齢差とか世間体とかあって、オレとかお前らと先生がマジで付き合うってのは無理だと思うけど……、それでもオレの燃え盛った恋の炎は消えないんだ！」
「わーったよ、わかりました！　お前が本気だって事が。せーぜー頑張ってくれと」
　これは……、以前僕に言っていた事だ。それを今度はみんなに言った……。本気も本気だ……。
（ん、まだ起きてるのか？）
（あ……、まぁ……）
（聞いたろ、オレがちなみちゃんを想う気持ち。……そろそろ生徒会の選挙始まるだろ。オレはもちろん会長に立候補してやる。……そして、２年の終業式でオレはあの人に告白する。オレの正直な気持ちを、な）
（……！？）
　告白。今はっきりと耳にした。告白……。相手に自分の気持ちを全てさらけ出す行為……。どれだけの勇気がいることだろうか。想像も出来ない。
　……考えているうちに本格的に眠くなってきてしまった。

「……君はどうしてそこにいるの？」
「……」
「どうして泣いているの？」
「……」
「誰かにいじめられた？」
「……。違う……」
「じゃあ……どうして……？」
「……。怖い……」

「何が？」
「わからないけど……、怖い……」
「……」

夢は途中で終わっていた。不思議な夢だった……。
どこか知らない所に佇む僕と、膝を抱えて座りながら泣いている子供。
本当に理解しがたい夢だったけど、変に鮮明に残ってしまった。
また次も見られるかな……？

さて、今日は班行動。事前に決めていたコースに従って行く。……だけど正直面白くない。
夏は過ぎたとは言えまだまだ暑く、見学場所によってはお金を取られたり、結構距離もあったりする。誰かが不満の声を漏らすのもそう遠くはなかった。
「あーもー、あっついわね～。まだ歩くの～？」
「でももう少しだろ？　なぁミネタク」
「うん、一応はね……」
「暑い暑い言うてたら余計暑ぅなるで～。みんな～、がんばろ～な～……。はう～、ふらふらや～。眠い～」
「アタシもよ～……。ゆうべすっかり話し込んじゃったよねー」
「お？気になるなー。何話してたんだ？」
「はぁ？　言えるわけないでしょこのバカ！　ねー凛子ちゃん？」
「そやね。男の子にはナイショやで♪」
「ちぇっ、ちぇっ！　つまんねーの！」
女の子の方も、やっぱり昨夜消灯時間に話してたんだ……。圭輔くんが気になるのもわかる。僕も気になったから……。
クラスのムードメーカー的存在の圭輔くんなら、他の女子の話題に上がる事も多いだろうから気になるのは分かる。

……僕は圭輔くんほどではないだろう。いや、話題にすら上がらなかったかも知れない。でも、気になるものは気になる。
「……あっ！？」
ふと気付くと、辺りの風景が変わっているではないか。みんなは……いない。ただ一人を除いては。
「凛子さん？」
「うん。も～、ミネタクくんったら一人でどっか行くんやもん。うちが探しに来たのよ？」
「ご……ごめんね……。みんなは？」
「それなんやけど、うちもどこから来たのか忘れてもーたの……」
「……まさか、迷子？」
恐る恐る尋ねてみると、彼女は小さく頷いた。……確定だ。
「ど……どうする？」
「いつか来るわよ。探しに。せやから、ヘタに動かんと、ここで待っとった方がええと思う」
「そうだね……。じゃあその辺に座って待ってようか。ちょうどベンチもあるし」
「うんっ！」
偶然にもベンチがあったので、そこに2人で座る。……期せずして2人っきりになっている。
「あのさ……？」
「ねぇ……？」
2人して全く同時に声を発していた。僕は思わず顔を背けてしまった。
「あ……、そっちから言ってええよ」
「いや……、凛子さんからでいいよ」
「そう？　わかった……。あ……、あの……。ミネタクくんって、好きな人……、いるの……？」
「……！？」
「うちはね……、いるんよ……。転校してきたばっかりで何もわか

らんかったうちに、優しくいろいろと教えてくれはった、素敵な男の子が……」
いきなり何を聞いてくるのかと思えば、僕に好きな人がいるかどうかだった。
凛子さんはさらに続ける。
「あはは、いきなり何言うてるんやろね。こないなことミネタクくんに言うたかてしゃーないもんな……。あはは……」
「……」
「……ほら、次はそっちの番よ？　なぁに？」
「あ……、えっと……。実は僕も同じこと聞こうとしてたんだ……」
「えっ……。じゃあ、うちに好きな人がいるんかって聞こうとしたの？」
「うん」
「もう言うたやん……、ついさっき……。せやからミネタクくんも言ってくれへんと不公平よ……」
「わ……、わかった……。僕も……いる。明日が見えなくてもがいていた僕に、手を差し伸べてくれた人が……」
「……ちなみちゃんの事やね。……わかっちゃった」
当たっている。……そう、僕はちなみ先生を『先生』としての視点とは別に『異性』として意識している部分がある。
彼女がいなかったら、僕は今ここにいない。だから僕は、先生の事を特別視している。
……そう、隣にいる凛子さんよりも。同年代の女の子よりも。
「そっ……か。それじゃあうちじゃ……、敵わないよね。あの人かわいいし、それでいて大人やし……。うちなんか弱虫やし、そのくせ口悪いみたいやし、ちなみちゃんほどかわいくないし……。くすん……」
「凛子さん……」
彼女が泣く理由がわからなかったけど、ここですべき事は心得ているつもりだ。僕は彼女に正面から向き直り、流れる涙を指ですく

ってやった。
「アカンよ……。そんな事されたら……、もっと好きになってまうやんか……」
「僕は……、まだ誰が好きとかよくわからないんだ。さっきのも、異性として好きなのか人間的に好きなのか判断付けづらい」
凛子さんは目に涙をためながら、僕の話をしっかりと聞いてくれている。だから僕も、誠心誠意話さないと。
「……ともかくね、女の子が目の前で泣いているのに、何もしないで見過ごす男なんて最低だと思うからこうしたんだ。……って、これは圭輔くんの受け売りだけ……ど……」
言い終わる前に不思議な感触に襲われた。……凛子さんが僕に抱きついている。夢まぼろしではなかった。目の前の彼女は確かに僕に接している。
「うち……、寂しいの……。……ずっと、ずっと待ってるからね。ちなみちゃんの事が好きでもええねん。うちも、その気持ちに負けないくらいあなたの事が好きやから。……待ってるから！」
「……」
「もう少し……、このままでいてもええか……？」
「うん……」
「おおきに……」
凛子さんの髪が僕の顔をくすぐる。……いい香り。

僕は確かに凛子さんの事も好きだ。
でもそれはきっと『友達』としての『好き』でしかない。
だから僕は、彼女の事を『いいお友達』として認識しているのだろう。
いや、『いいお友達』としか認識していない。異性として好きと思ったことは（恐らく）ない。
でも、ちなみ先生は違う。まず、異性と思っていることからすでに違う。

……今日のこの出来事で、知ってしまった真実がいくつも発覚した。
凛子さんが僕を好きだということ。そして、僕はちなみ先生を異性として見ていること。

……それにしても、圭輔くんたち遅いなぁ……。

長かった移動教室も終わり、また普通の学園生活が戻ってきた。
……しかし、そこからは考える日々が続いていた。
凛子さんはというと、あの日を過ぎても特に何もなかったかのようにみんなと接している。当然僕にも。
ちなみ先生もやっぱりマイペースで授業を進めている。……あ、そう言えばちなみ先生にも好きな人はいるのかな？
……っ！　一番肝心な事を聞いていなかった！　近いうちに聞いてみよう。そんな時……。
「よっ、ミネタク。どーしたんだ、ボケーッとしちまって？」
「丁度よかった圭輔くん！　……先生に好きな人はいるのかって知りたくない？」
「お、珍しく積極的じゃねぇか。そりゃ知らないよりは知っておきたいけどよ、まさか知ってるのか？」
「いや、それはまだ。だから聞いてみないのかな、って」
「なんだよ、そういう事か。んじゃ早速今聞いてみようぜ！」
「えっ、今！？」
「こーゆーのは早い方がいいんだよっ！　ほい、行くぜ！」
「わっ、待ってよ～」

放課後だったので先生は教室にはいなかった。なので職員室に向かった。
数回ノックをして、先生を探す。……お、いた。こうして見ると、

教師達の中に私服の生徒が紛れ込んでいるとしか見えない。
大量の本が置かれている机に向かい、先生に話しかける。……圭輔くんが。
「あれ？　どしたの2人して？」
「ちょっとお尋ねしたいことがありまして……。ここじゃアレだから外に出て欲しいかな～、みたいな」
「ふみゅ？　ここじゃダメなの？　……ちょっと待ってね。こないだの漢字テストの採点がもうすぐ終わるから……」
そう言うと先生は赤ペンを握りなおし、用紙にチェックを入れている。そうしている先生の目は真剣そのものだった。
「……っと。よ～っしおっしま～い♪　あっ、もういいよ！」
「あ、終わった？　すみませんねー急かしちゃって。そいじゃ出ましょーか」
僕らは先生を連れて外に出る。そして単刀直入に聞いてみる。
「ね、先生？　先生って好きな人いないの？」
「……え？　好きな人？　そんなの決まってるじゃ～ん。クラスのみんながだ～い好き☆」
「そ……、そーじゃなくて……。そういう好きじゃなくてさ、……アレだ、恋愛対象として好きな人はいないのかな～……って」
「……言わなきゃダメなの？」
「出来れば。参考になるし」
「何の参考になるのかわかんないよ～。でもわかったわ。大好きな生徒さんからのお願いだもんね。言っちゃうわ」
……僕らは息を呑み、次の先生の言葉を待った。
「……いるわ。実は、もう婚約もしてるの。……口約束でしかないから指輪とかまだないけどね」
「……！！」
僕も圭輔くんも驚きを隠せなかった。また一つ……真実を知ってしまった……。しかしこの真実は……知りたくなかった……。
「その人はね、今外国でお料理の修業してるの。お料理といっても、

お菓子がメインだけどね」
「外国！？　すっげー！」
「そこで培った技術を使って、自分だけのお店を持ちたいんだって。素敵な夢だと思わない？」
「す……素敵だと思います」
「あとね、こんな事も言ってたわ。『この世界には、いつでも悩みが存在している。僕は、少しでもみんなの悩みを解決してあげられるような、そんな人間になりたい。僕の店に来てくれたお客さんが、帰るときには元気になれるような空間を提供してあげたいんだ。……それには、もっともっと腕を磨く必要がある。……いつになるか分からないけど、自分だけの店を持てたら、必ずあなたを迎えに行くから、それまで……待っててくれますか……？』……って。……っきゃあ～！　そんな事言われたらもうね、メロメロなの～♪」
「凄い人……なんですね……」
「そーなの！　彼が留学する前に一回だけパフェ作ってくれた事あるんだけど、も～すっごくおいしいの！　修行なんかする必要ないと思ったけど、ダメなんだって。これじゃまだありきたりすぎるから、もっと奇抜な物作りたいとか……」
「すっげぇ……。夢ありまくりじゃないですか！」
「そうなのそうなの～。あとねあとね、彼ってね、背もこ～んなに高いし、ちょっとヘンな所もあるけど優しいの～。ふみゅ～、また会いたくなっちゃったぁ～……」
　子供のように手をばたばたさせながら、僕らのまだ見ぬ婚約者の自慢をするちなみ先生。
　こんな嬉しそうな表情、今まで見たことがない。
　そしてその表情は、僕が生み出したものではない。
　僕はその事実を受け入れられず、脱兎の勢いでその場を去ってしまった。
「あっ、ミネタク！　……ったくあんにゃろ、挨拶もしないでいきなり帰るとか礼儀知らずもいいとこだぜ。……ごめん先生！　邪魔

しちゃった。また明日なー！」
「あ、う、うん。ばいばーい。遅刻しちゃダメだぞ？」

信じられない。信じたくない。先生に婚約者がいたなんて。
いきなりあんな事言われたって、受け入れられるわけがない。……いやだ！
……とその時。僕に電話がかかってきた。
「よっ、元気か？」
電話の相手は圭輔くんだった。電話越しの友人はいつもの調子で話しかけてくる。
「……いや……」
「まっ、それもそーか。正直オレもそうだ。メシも3杯しか食えなかったしな。もー何かこうアレだ、胸のつかえが取れないみたいな。うん」
「それは……、単に食べ過ぎなんじゃ……？」
「バカ、何言ってんだよ。給食の時お前、いったいオレがどんだけおかわりしてると思ってんだ。いっぱい食って背ぇ伸ばして、チビチビ言ってくるみさきのアホに一泡吹かせてやるんだ！……まぁそれはいいんだよ。それよりな……、正直しんどいよな……」
「そう……だね……」
「……んだけどな、あんまりくさるんじゃねぇぞ。オレみてーにもとから叶わぬ恋だって思ってりゃなんとか受け入れられるもんだよ。つか、応援したくもなってきてる」
「僕には出来ない……。だって僕は……本当に……」
「ん～、まぁオレもあの人の事をマジで好きになりそうにはなった。でも……やっぱ無理だわ。会長に立候補したはいいけど見事に惨敗だろ？　カッコつかねーもん」
圭輔くんは、移動教室後に開催された生徒会選挙において予告通り会長に立候補をした。
しかし結果は、本人も言うように惨敗。やはり生徒会役員を経験

していない人間が選ばれるほど、甘くはなかったということだろう。
「いつだったか、2年生が終わったときに告るって言った気がするけど、やっぱやめたわ。……だからさ、つれーかも知れねーけど、ここは男らしくスッパリと諦めた方がいいぜ、な？　オレも断腸の思いで諦めたんだから」
「……」
「……ったく仕方ねーなお前は。じゃーよ、とりあえず自分の気持ちだけでも言うくらいはしたらどうだ？　そうすりゃ諦めも付くだろうし」
「……。うん……」
「よーし決まり！　自分の腹が決まってるうちに言っちゃった方がいいぜ。出来れば早い方が」
「うん……」
「お前にこの言葉を贈ろう。『初恋は実らないもの』ってね。これからだこれから。オレにもお前にも平等にチャンスがあるんだ。応援してるぜ！　またな！」
それだけ言い残して電話を切る圭輔くん。彼の一言一言が全て僕に突き刺さる。
……この日はすぐに眠りにつく事が出来た。

「……また、会ったね」
「……」
「君は……僕なんだね」
「……！！」
「もっと言うと、君は僕の弱い心。負の考えを持った僕。だからいつもそうしているんだ」
「……わかった所で、どうにかなるの？」
「どうにかなるんじゃない。どうにかするんだ」
「できるの？」

「できるさ。そうすれば……、君も落ち着くはずだから……」
「……」

また夢を見た。いつかのあの夢の続きだ。
だけど今度ははっきりと2人の関係がわかった。2人とも……僕だったのだ。
泣いている方の僕は、僕の弱い心が実体化したもの。
こっちの『僕』がいるから、いつも結果ばかりを恐れているんだ。
変えていかなきゃ……。

あくる日、僕はついに決心した。
今日、先生に告白する。
別に何も失う物なんてないんだ。
あるとしたら、過去の僕。
弱い心で満たされたダメな僕。
これを言えたら、僕の中で全てが変わるんだ！
「……よしっ！！」
めずらしく気合を入れて家を出る。なんだかいつもより朝の空気が気持ちいい。
……いよいよ学校に着いた。
一世一代（と言うと大袈裟だけど）の大勝負が待っている。
一歩一歩、噛みしめるように歩く。
そして、ゆっくりと教室のドアを開ける。
思った通り、誰もいない。
でも、いつものパターンだとそろそろ先生が来るはず。
しかし、待てども待てども来ない。……おかしい。
このままだと誰かが来てしまうではないか。
待つ。……それでも来ない。

待ち呆けていた僕に告げられた真実。
それは、先生が倒れたという報せだった。

第5章：全てを受け入れて

確かに先生は倒れた。しかし、そうは言っても大したことはない。ただ疲労で体調を崩しただけだったという、伝え聞くうちに尾ひれがついたよくあるパターンだ。

だが、入院をしたというのは本当だ。

いてもたってもいられなくなった僕は、放課後に先生の入院した病院へと向かった。

病院には久々に来た。消毒の匂いが鼻につく。

僕は受付で先生のいる部屋の番号を尋ね、そこに向かう。５Ｆの５０７号室。よし、覚えた。

５０７号室のネームプレートに書かれた名前を確認する。……ここだ。

コン……コン……。

２回ノックをして、在室を確認する。

「は～い、どうぞ～」

「……失礼します」

ゆっくりとドアを開け、中に入る。そこには案外元気そうなちなみ先生がいた。あとは、僕と同年代と思われる制服姿の男の子もいた。

「あ～、嶺山くんじゃない。もしかしてお見舞いに来てくれたの？ごめんねー、いきなり休んじゃって」

「ねえさん、知り合い？」

「うん。私の生徒さんよ」

「先生の……弟さんですか？」

「そうよ。この子が私の弟。新一郎っていうの。なんか友達少ない

っていうからさー、お友達になってあげてくれない？」
「あ、もちろんですよ。えっと……、初めまして。僕は嶺山拓真っていいます。新一郎くん、よろしくね」
「う……うん。僕の方こそよろしく」
「うふふ、かっわいい～」
先生はいつもと変わらぬ様子だった。先生の弟さん……新一郎くんとも知り合えたし、来てよかった。でも、何か大事なことを忘れてる気がする……？
あまり長居をしても仕方がないので、僕は新一郎くんと共に病院をあとにした。
……後日聞いた話によると、僕らが帰ったすぐあとに凛子さんが来ていたとのことだ。

「はい、どうぞー？」
「失礼します……先生」
「あー、凛子ちゃん！　さっき嶺山くん来てたよ。一緒じゃなかったの？」
「一緒やったら……どんなによかったか……」
「え？」
「うち……、うちな……。彼のことが……好きなんです……」
「えっ……？」
「でも彼は……、うちのことなんか見えてへんの……。見えてるのは……、あなただけなの……」
「え？　え？　どういうこと？」
「わからないの？　……彼は、ちなみちゃんのことが好きなんよ……。うちやなくて……。くすん……」
「と、とりあえず座って、ね？　泣かなくていいんだから～。ね、どうしたの？」
「うん……。ごめんね、お見舞いに来たはずやのに困らせて……。お話、聞いてくれるの？」

「もちろんよ。話してみて？」
「はい……。こないだ、移動教室あったやん。うち、その時2人っきりになれたんよ。そこでね……、好きな人いるって聞いたのよ……」
「わぁ、頑張ったじゃん。それで？」
「それで答えてくれたんやけど……、その答えがね……、ちなみちゃんのことやったの。なんか『明日が見えなくてもがいてた僕に手を差し伸べてくれた人』って表現してたの」
「そう……。あの子そんな事言ってたの……」
「うちが『好きな人いる？』って聞いた時にはっきりそう言うたから……。うちには心当たりないし、普段の様子見てたらわかるし……。ちなみちゃん、わからんかった？」
「あっちゃ～、じゃあこないだ私のだーりんの話したのはまずかったなぁ……」
「え？　だーりんって？」
「あ、凛子ちゃんには話してなかったわね。……私ね、付き合ってる彼がいるの。もう婚約もしてる。指輪はまだだけど……ほら」
「そういえばしてないね……。でもやっぱ大人やね……。うちとはえらい違いやわ……」
「そんな事ないよ～。……でもあの子が私の事をそう思ってたなんて……」
「ちなみちゃん、鈍すぎやよ……。ミネタクくんだけやなくて、他の男の子もみんな、ちなみちゃんのこと好きみたいに言うてるよ。どれだけ真剣かはわかんないけど……」
「……よし、わかった。退院したらみんなの前で言う。私には婚約者がいる、って……」
「えっ……。言っちゃうん？」
「考えたら、別に隠すようなことでもないと思うのよね。どうせいつか分かっちゃうんだから、変な噂立たないうちに……ね」
「そう……。わかった。ほな、うちもう帰ります。先生、せいいっ

ぱい養生してな」
「うん。今日はありがと。早く治してみんなの所に戻るからね……」
数日後、先生が戻ってきた時の顔色は良好そのものであった。そして、第一声は僕らを安心させるものだった。
「みんな、心配かけちゃってごめんね！　お見舞いに来てくれた子もいたけど、すっごく嬉しかった！　みんなだ～い好き！」
「いやいやー、先生が元気になって何よりですよー」
「ありがとー。……それとね、入院してる間、ずっと考えていたことがあるの」
先生は不意に目を伏せ、ややくぐもった声で呟く。
「みんなに言おうか言うまいか迷ってたんだけど、どうせいつか分かっちゃうことなら……」
「……？」
クラス全体にクエスチョンマークが浮かぶ。……次の瞬間、クエスチョンマークはエクスクラメーションマークに変わった。
「わ……私には、婚約者がいます！」
「……！！」
教室が騒然となる。……それだったか。
この事実を言われる前に知っている人間はほとんどいないだろうから、この喧騒も無理はない。
ざわめく教室も、先生が再び口を開くと、瞬く間に水を打ったように静まり返る。
「まだ詳しくはわかんないけど、たぶん春くらいには決まると思うの。……あっ、誤解しないでね。先生はまだ辞めないわ。妊娠とかしたら育児休暇取るとは思うけど……」
その話にじっくりと耳を傾ける者。逆に耳を塞ぎ、現実逃避を試みている者。呆気にとられる者……。ざっと見て教室内は３つのタイプに分かれているように見えた。
みさきさんはやや呆気にとられながらも、しっかりと耳を傾けて

いる。それは分かる……が、凛子さんはすでに分かっていたかのように振舞っている。……なぜだ？
……ともかく、僕の初恋は……、年上の女性に向けられた淡い恋心は……。秋風吹きすさぶ日に……、消え失せてしまった……。

先生に気持ちを伝えないまま月日は流れ、とうとう年が明けてしまった。僕なりに悩んでも、答えが出ない。
僕はやはりちなみ先生の事が好きだ。しかし彼女には婚約者がいる。僕にはどうする事もできない。
彼女の事を思うのなら、ここでスッパリと諦めて、先生の幸せを願うのが筋というものだろうが……、気持ちが変わらないのなら、そう思うことはできない。
どうすればいいんだ……。どうすれば……。
「よぉ、どうしたよ？」
「圭輔くん……？」
「まーた一人でお抱えか？　そんなんで解決できっかよ。どれ、ちっとオレに話してみろや」
「いや……いいですよ……」
「何でだよ？　話してみるだけでいいんだって」
「だから……いいですって……」
「んーなこと言わずによー。な？　大丈夫だって、秘密厳守すっから！」
「……」
これ以上はありがた迷惑だった。そう思った僕は無言で席を立ち、その場を去る。圭輔くんには悪いけど、一人にしてほしかった。
「お、おいミネタク！　……ったく、どうしちまったんだ？　まだダメなのか……？」
それからの僕は、半ば抜け殻状態だった。

ただ、なあなあと日々を過ごしていた。
何も得ることのない日常だった。
無気力。そんな表現が最も似合っていた。
そんなさなか、僕に向けられた視線には全く気づかなかった。

いつだったか、2年生の最後のテストが終わった時だろうか。帰り際の僕は誰かに腕をつかまれた。……凛子さんだ。
「ミネタクくん……。今日、うちに来て欲しいんよ。……待ってるからね。ほな、あとでな……」
それだけ言い残し、さっさと帰ってしまった。行かなきゃいけないのかな……。あまり気は進まなかったが、行くだけ行ってみるか……。

凛子さんの家に着いたら、家の前に彼女がいた。待っていてくれたのだろうか……。
「来てくれたんやね、おおきに……。今日はうちしかおらんから、ゆっくりしてってええよ」
そう言いながらドアを開ける凛子さん。僕も促されるままにおじゃまする。
「2階に行ってて。そこがうちの部屋やから」
「う、うん……」
女の子の部屋……か。14年近く生きてきて、生まれてこのかた女の子の部屋には入ったことがない。
初めての体験にどぎまぎしながら、ゆっくりと部屋に入る。
全体が白やピンクで統一されており、家具の量のわりには広々とした印象を受ける。やっぱり……、凛子さんも女の子なんだね……。
「えへへ、どないや？　うちの部屋。かわいい？」
飲み物の入ったグラスを2つ持ちながら、凛子さんが僕に問いかける。
「うん、そうだね。ぬいぐるみとか多いんだね」

「そうなんよ。なんかあげよっか？」
「いや、遠慮しとく。もらったって僕には似合わなさそう……」
「……」
「……」
会話が止まってしまった。微妙に気まずい空気が流れ込む。
「あのさ……？」
「ねぇ……？」
と思ったら、2人同時に声を発する。いつか見た光景に、思わず吹き出してしまう凛子さんがそこにいた。
「きゃははっ、またうちら同時に聞いとるやん。おっかしぃ～！」
「そ……そう……だね……。あははは……」
「ほな、うちから聞くね。……あれから気持ちに少しでも変化あった……？」
「……？」
「もうっ、忘れたん？　移動教室の時2人っきりになれたやん。その時から気持ちは変わったのかな？　って聞いてるんよ」
「えっと、その……」
「……」
どうしよう、全くわからない。
自分の正直な気持ちが、わからない。
とその時、小さく彼女が聞いてきた。
「……ちなみちゃんのことで、まだ悩んどるの？」
「えっ……？」
「もう無理でしょ……？　あの人、自分で婚約者おるって言うたやん……。そんな人から奪おうとか、できるの……？」
「……」
「……さっきからずっと黙ってるけど、はっきり言うてくれないとわかんないよ……」
「……」
わかってる。あなたが何を言いたいのかは。

『まだ先生の事が好きかもしれないけど、あの人には婚約者がいるんだから、奪おうったって無理』ってこと、だと思う。
「ねぇ……。答えてよ……。くすん……」
「……！？　どうして……、どうして泣くの……？」
「もう待つの……疲れたの……。すごく切ないの……」
「ごめん……」
「なんで謝るの……？　ぅぐっ……」
「泣かせたのは……僕だから……。僕がはっきりしないから、あなたを待たせすぎちゃったから……」
「……」
「やっぱり、待ってるのってすごく辛いよね。切ないよね。先生も今、婚約者の男の人が外国に留学に行ってるし、帰ってきても店を出すまで待たなきゃならないんだって」
「それはうちも聞いた……」
「みんなの前では明るく振舞ってるけど、本当はとても辛いんだと思う。逢いたい時に逢えない辛さ……、どれだけのものなのか想像さえできない……」
「うん……。でも、うちもすごく辛いの……。毎日のようにタッくんに逢うてるはずやのに、なんかすごく遠い存在みたいな気がするの……。だから待ってるのよ、うち」
「タッくん……？　まぁいいや。その辛さ……、共有できる相手はやっぱり欲しいよね……。一人で抱えきれないものを無理に支えようとしちゃダメだよ……。僕でよければ……、一緒に持ってあげるから……」
「どういうこと……？」
だから僕も、自分自身が何を言いたいのかがようやくわかった。
だから僕は、今からその気持ちを伝える。
「今から言います。……凛子さん、待たせちゃってごめんなさい。僕は……僕は、あなたの事が……好きです。僕と……つ、付き合ってくだ……さ……」

言い終わる前に抱きしめられていた。これも以前と同じだった。……しかし今回は、さらに強く……抱きしめられている……。
彼女の顔が、それこそ目と鼻の先にある。彼女の吐息が直にかかる……。
「やっと……逢えたね……。うちのことが好きなタッくんに……。うち、幸せよ……。大好きやねん……」
静かに、僕の耳元で囁く凛子さん。僕も同じように彼女を抱きしめ、同じように耳元で囁く。
「もう……、ひとりじゃないんだ……。僕も、あなたも……。ね？」
「うん……、うん……！　ぎゅぅ……っ」
誰もいない部屋で、無言で抱き合う僕ら。傍から見たらだいぶ滑稽に見えるだろうが、今の僕たちにはそんなものは関係ない。
「……タッくん……？」
「……なに……？」
「うち、眠くなっちゃった……。一緒におひるねしてくれへんか……？」
「うん、いいよ……。僕も少し眠いから、一緒に寝られるよ」
「おおきに……」
2人で凛子さんのベッドに入る。あまり大きなものでもなかったが、中学生が2人寝そべるには特に支障はなかった。
「こういう日が来るのを……ずうっと待っとったのよ……。大好きな男の子とこうする事を……。うち、今日という日を絶対に忘れない」
「うん……。僕も……、忘れない」
「おおきに……。もっと近づいて……。そしてうちを抱きしめて……。タッくんに包まれて眠りたいの……」
言われるがまま、僕は彼女をもっと近くに引き寄せる。……彼女の鼓動を直に感じている。僕のも……感じているのだろうか。
凛子さんの瞳が閉じると、小さな寝息が聞こえてきた。静かで、

規則正しい。
そんな彼女に、ゆっくりと顔を近づける。……と、その時だった。
「……！」
不意に彼女の目が開かれたかと思うと、僕の体をさらに引き寄せ、自分の口と僕の口とを重ね合わせてきた。
（ん……んくっ……）
（んん……）
全て凛子さんのなすがままだった。
2人の繋がった部分で絡まりあう物の、不思議な感触に心地よさを覚える。
唇が離れても、その間に生じた細く透明な糸状のものはしばらく消える事は無かった。
「えへへー。キス、してもうたね」
「これが……キス……。よく本とかだとレモン味だって聞くけど、はっきりとした味なんてないよね。……ないなら今名付けちゃおうか」
「ん？　どういうこと？」
「僕のファーストキスは……凛子さんの味でした……。って」
「……！　どうしよう、うちすっごくうれしいの……」
「僕もだよ……凛子さん。今度は僕の方からしていいですか？」
「……どうぞ……」
うっとりと目を閉じた彼女に、再び口を重ね合わせる。舌を絡める音がどこか恥ずかしい。

互いの体温、質感を確かめ合う事数分。次に口を離したときには2人とも少し息が上がっていた。
「……はぁ。ちょっと長くやりすぎちゃったね」
「うん……。息が止まったら仕方ないね」
「あはは、そーやね。……でも、気持ちよかったの……」
「僕も……。誰かを好きになって、愛するってこんなに素晴らしい

事だったんだね……」
「そうよ……。好きな人と一緒に居れたら、これ以上の幸せはないねん」
「僕らは、お互いがお互いのことを好きに、大切に思えるような関係になったんだね……」
「なぁ、タッくん……。うちら、ずっとずっと一緒に居ような……。そして、一緒に居るだけで幸せて思えるような、そんな仲になっていこうな……。約束やで……？」
「うん……、もちろん。約束するよ、僕は絶対あなたを離さないって！」
「うれしい……うれしいの……！　うち……、うっ、うわあああああーーーーーーん！」
（これで……、これでいいんだよね……。凛子さん……？）
僕に抱かれながら泣きじゃくる凛子さんを優しく撫でながらそう呟いた。恐らくは聞こえていないだろうが、それでもいいんだ。
長く……長く果てしない距離。僕と彼女の距離。自分の気持ちに、もっと素直になっていれば……。

初恋は、先生だった。
今、僕の隣にいる人ではなかった。
明日を見失った僕に、再び生きる希望を与えてくれた人。
恐れ多くも僕は、その人に恋心を抱いてしまった。
隣に居る彼女ではなくて。
だけど、先生には婚約者が居たのだ。
それが先生をあきらめる事になった直接的な原因ではないが。

「凛子さん、寝ちゃった？」
「すー……すー……」
彼女は僕に抱きつきながら眠ってしまったようだ。僕も少し眠ろう……。

「……こんにちは」
「やぁ。また会ったね」
「うん。でも、もうお別れだよ」
「……？」
「僕は、君の弱い心。君に心の支えが出来た以上、僕の存在意義なんてもうないんだ」
「それもそうだね。……でも君はそれでもいいの？」
「うん。君の幸せに、僕の存在は邪魔なんだ」
「そう……なんだ。わかった、元気でね」
「あはは、元気でねって言葉はちょっとおかしいよ。……まぁいいや。もう会うことはないだろうけど、君も元気でね！」
「うん！」

３回目の夢。今度は、自分自身の弱い心との決別が描かれていた。
凛子さんという、絶対的な心の支えのおかげで『あの子』はいなくなったけど、僕の幸せにとって『あの子』の存在は邪魔だったのだ。
何かを得るためには、何か別の物を犠牲にしなくてはならない、という事はよく耳にする。
でも出来れば、何の犠牲も出さずに幸せを掴みたい。
そのための方法はこれから、２人で見つけていこうね……。ね、凛子さん……。

「うぅ～ん……。ん？」
「あ、おはよう凛子さん。よく寝てたね」
「タッく～ん。なんで離れとるのよ～」
「はいはい、じゃそっち行きますよ」

「……ええよ。うちがそっち行くから」
「……うん」
「タッくんも少し寝たん？」
「うん。本当にちょっとだけだけどね」
「そっか～。ね、うちどんくらい寝てたん？」
「ん～、わかんないけど、１時間くらいじゃないかな」
「いやや～、そないに寝とったんか～。なぁタッくん。うち、いびきとか歯ぎしりとかしてへんよね！？　ね！？」
「わっ、大丈夫だって。何も聞こえてきてないから。もぅ、凛子さんって意外と心配性なんだね」
「ちゃうねん～。大好きな人に恥ずかしいとこ見られとーなかっただけやもん……」
「そう……」
「うん。……というかタッくん。もう凛子さんって呼ばんといてーな。なんかよそよそしいやんか。なんか他の呼び方ないん？」
「それもそうだね……。でもどうしよう、僕そういうの考えるの苦手なんだよね……」
「よそよそしくないんなら何でもええねん。とりあえず言うてみ？」
「う、うん……。じゃあ……凛子ちゃん？」
「なんか普通やね～。圭輔くんかてそう呼んどるやん。却下」
「さっきなんでもいいって言ってたのに……。それじゃ……りんちゃん？」
「あんまり変わらん。ほなそれをちっと変えて……リンリンなんてどないや？」
「……うん、いいんじゃないかな？　ちょっと呼ぶとき恥ずかしいけど呼びやすいし」
「決まりや！　今日から2人っきりの時は、タッくんはうちのことをリンリンって呼ぶこと！　ええか？」
「うん。でも、2人っきりって？」
「みんないる時にそう呼び合うと絶対うちらが付き合うとるってわ

かってまうやんか。まだなんか、知られて変なうわさされんのイヤやねん。タッくんもイヤやろ？」
「……イヤだ。される必要もない冷やかしとか勘弁してほしいし」
「でしょ？　わかった？」
「わかりました。凛子さ……いや、リンリン」
「はい……」
まだ慣れない、彼女の新しい呼び方。少しずつ慣らしていかなきゃな……。
その為には、もっともっと2人っきりになれる機会を増やす必要があるんだ。頑張ろう。

「……あ、もうこんな時間だ。すっかり長居しちゃったね……」
「ええよ、気にせぇへん。一緒に居られて幸せやったし……」
「僕も。……でももう帰らないと……」
「……そやね。いつまでも引き止めたら悪いし。……ほな、またね。……いつでもうちに逢いにきてな……。毎日待っとるから」
「わかったよ……。僕のほうも、いつでも待ってるから。たまには僕ん家にも遊びに来てよ。歓迎するからさ」
「もちろんや！　……タッくん……」
「ん？　どうしたの？」
「バイバイする前に……もう一度……キスして……」
「うん……わかった」
三たび、重なり合う唇。本日最後のキス。
他の誰かと、こんな行為をする時が来ようとは思わなかった。
あったとしても、もっと後のことかと思っていた。
でも僕は確かに今、彼女と接している。
どう言い表せばよいかわからないけど、絶対に手放したくない、手放してはいけない時間ということはわかる。
幸せな時間は、あっという間に過ぎ去っていった。

家に帰り、今日起こった事を思い返す。リンリンの家に行き、告白を受け、僕の方も気持ちを伝える。抱きしめあい、ベッドの中でキス。

果てしない距離が一気に縮まり、ここに一つに重なった。過去の弱い心と決別できた僕は明日から、いや、今この瞬間から違う自分に生まれ変わる事が出来る。

明日が見えなくて悩んでいた僕に光を与えてくれたちなみ先生。

そして、僕のネガティブな心を全て打ち砕いてくれた、大切な存在であるリンリン。

こんないい人たちに囲まれて、僕はなんと幸せ者であろうか。

ずっと他人と距離を取っていた昔の僕が本当に情けない。

人との距離なんて、自分が作らない限り生まれるものではない。

それを永続させようとした僕は、もういない。

永遠はあるかも知れないが、永遠に終わらない、縮まらない距離は……ない。

……考えているうちに眠くなったので、そのままゆっくりと眠りについた。

「タッくん……。タッくん……」

「……ん？　リンリン？」

「そうよ。……えへへ、夢でも逢えたね。うち……嬉しい」

「そっか、ここは……夢か。……せっかくだから、どこか行こうか」

「ううん……」

「えっ？」

「ええよ……。うち、タッくんと一緒に居られるだけで幸せやの。タッくんと一緒に居られるなら……どこにも行かんでええ。どこも行かんで……、あなたの隣に居続けたいの……」

「そうだね……。ごめん。それじゃ……この夢が覚めるまで一緒にいよう」

「うん……」

……新しい夢だ。僕とリンリンだけの世界。僕も彼女も、きっと同じ夢を見ていたんだ。

今は隣にいないかもしれないが、心はいつも繋がっている。これは間違いのないことだ。

僕は今ここに、新たな道を見出した。

それからの学校生活は、まさに充実と言うに相応しいものだった。

僕らが付き合っているという事実は、まだ誰にも明かしていないけど、時期が来たら言ってもいいと思う。

今はまだその時じゃないけど。

……とその時、先生が話しかけてきた。

「最近やけに元気じゃない？」

「おかげさまで。……どこか吹っ切れたんですよ」

「そう。よかったじゃない」

「先生には本当に感謝してます。……どうか幸せになってくださいね」

「ありがと。……うふふ、あなたたちもお幸せにね」

「……知ってたんですか」

「恋する女の子の目を甘く見ちゃダメよ。……あんまり突っ込んだ話はしないけど、私も応援するわ。頑張ってね」

「はい。……先生……？」

「ん？　なぁに？」

「ずっと前から言おう言おうと思ってたんですけど……、やっと決心がつきました。僕……、先生のことが……、好きでした。……もちろん今もその気持ちは変わりませんけど……」

「……やっぱり違うのねー。心の支えができると。やっと言ってくれたのね」

「はい……。すみません」
「謝ることないわ。……あなたは今、自分の殻を破った。それってすごい進歩じゃない！　誇っていいのよ。自慢していいのよ。……おいで、久しぶりにぎゅ～～～～ってしてあげる」
「はい……」
「……ぎゅ～～～～！」
先生に抱きしめられながら、僕は自分が変わったことを改めて思い知った。
僕は確かに今、先生に『好き』と言えた。
今まで言えなかったことが言えた。
それはまさしく、自分の殻を破ったことに他ならない。
それが出来た僕には、もう何も恐れるものはない。
これからは、自分を信じて、歩いていこう。

終章：果てしない距離の末に

月日は流れ、僕はすでに高校生になっていた。仲のよかったみんなとは、別の学校になってしまった。

圭輔くんとみさきさんはまた同じ学校に行ったって聞いたけど……。いいな……。

凛子さん……いや、リンリンは中学の成績が圭輔くんと常にトップを争っていたものだから、本当に成績のいい人しか入れない女子高に入ったのだ。

まぁ、いつも一緒だって誓ったんだから、学校が違う事など関係ない。

携帯電話も買ってもらったんだし、家もそれほど離れているわけでもないから、逢おうと思えばいつでも逢いにいける。

高校生活もそれなりに充実していた。入学直後に暴力事件を起こして退学させられた人がいたけど……。

そんな彼の友人と、僕は仲良くなった。名は霧原新一郎。そう、ちなみ先生の弟くんだ。

「はぁ……。どうしてあんな事したんだろう……」

「驚いたよね。でも、男らしいじゃん」

「確かにそうだけど……。いくらなんでも退学はやりすぎだと思うよ」

新一郎くんは、昔の僕にそっくりだった。たくさん話をして、悩みとか聞いてあげないと。

話題はある。ちなみ先生のこと、いろいろ聞けるじゃないか。

「ねぇ新一郎くん？」

「なんだい？」

「お姉さんのことなんだけど……」

「あ、拓真くんってねえさんの生徒だったんだっけ。そういえば」

「そうそう。かわいい人だったよ。一時期あこがれてたんだ」

「えー、本当に？　なんかよくわかんないけど、僕にいっつもちょっかい出してくるんだよ。やめろって言っても聞く耳持たないし、いつまでも子供みたいで困ったもんだよ」
「そうなんだ？　やっぱり身内の言葉は参考になるなぁ」
「うん。でも今は一緒に住んでないんだ。結婚して家出てっちゃった」
「あ、もうしてたんだ？」
「そうだよ。結婚式は身内だけ集めた地味婚だったから、知らないのも無理ないよ」
「そっか……。なんか残念だね。……どんな人だったの？　先生と結婚した人」
「えっと……、あれからほとんど会ってないからよく覚えてないけど、すごく背が高くて、優しそうな人だったよ」
「やっぱり……。名前はなんて言ってた？」
「……ごめん、ちょっと忘れちゃった。名字は増田って聞いたけど」
「増田さん……か。それだけじゃわかんないね。あ、お店は出したって聞いた？」
「まだじゃない？　ねえさんも何も言ってこないし。……というか、よくそこまで知ってるね。ねえさんから聞いたの？」
「うん、そんな感じ。中学のとき教えてもらったんだ。外国で修行してるとか、自分のお店持ちたいとか……」
「そうなんだ……。ねえさんけっこう口軽いからな。すぐ言っちゃうんだよそういう事」
「なるほど～。先生って家ではどんなだったの？」
「そうだね……。よく言えばお母さんの手伝いとかよくやってたね。でもそれ以外はね……、僕のもの勝手に持ってって、すぐ返してくれなかったり、そのくせねえさんのは貸してくれないし、いきなり僕の部屋に入ってきたりもするんだよ」
「ふ～ん……。なんか、イメージと違うな」
「僕にとっては先生であるねえさんの方がイメージできないけどね。

そんなもんだよ。……ま、でも何だかんだ言っても、いいねえさんだったよ。うん」
納得したように頷いた新一郎くん。彼とは気が合う（というか性格がよく似ている）ので、話していて凄く楽しい。圭輔くんとはまた違ったタイプの人なので新鮮でもあった。
……とその時、マナーモードにしていた携帯電話が震え始めた。
「あっ、携帯鳴ってるよ」
「ホントだ。ごめん、ちょっと見る」
着信は、リンリンからのメールだった。
彼女の学校は超優秀な進学校（しかも女子校）なので、メールすることはおろか携帯を持ってくることすら難しいというのに。
内容はこうだった。

件名：やっほ～☆

本文：タッくんおはよー！元気してた？　うちも元気だから心配しないでね。
今日も授業ぎっちりで泣けてくるけど、タッくんのこと思い出して頑張るみょ☆
それでなんだけど、土日って空いてる？
空いてたらどっか遊びにいこーよ！
タッくんと一緒ならどこでもいいよ！
ほな、またすぐ次の授業だからね。ばいばい♪

いつもと変わらぬ調子に安心し、折りたたみ式の携帯を閉じる。
メールの文面と普段の彼女の口調が違うのは、いつもの口調をそのまま打ち込んでも変換候補に現れないので面倒だからと言うことらしい。

「ねぇ拓真くん？　誰からだったの？」
「えっ……、誰って……」
目の前の友人は冷やかすように尋ねてきた。
「もしかして彼女とか？　いいなぁ、今度紹介してよぉ」
「えっと……えー……。あ、次の授業始まっちゃう！」
「あ、ひっどいの！　はぐらかしちゃって……」
こうして、僕は授業の方に集中する。

次の日曜、僕は約束通り遊びに行く事にした。
いつものクセはまだ抜けておらず、やっぱり時間より１０分以上も早く到着していた。まぁ、遅くなるよりはいいだろう。
当然リンリンはまだ来ていなかった。待ち合わせ場所は、公園の噴水広場。
遠目でもよく見えるから、待ち合わせには最適の場所だ。
実際今も、帽子を被った小さな女の子が、落ち着かない様子でそわそわしながら待っている。
……誰を待っているんだろう。かわいらしいな……あんな風に健気に待っている姿。……その時。
「……きゃっ！」
不意に風が吹き抜けたかと思うと、その女の子が被っていた麦わら帽子が僕のほうに飛んできた。
突然だったので驚いたが、手を伸ばしてそれを掴み、女の子に返してあげる。
「あ……ありがとう……」
「大丈夫？　今日は風が強いみたいだから、しっかり被ってないと飛ばされちゃうね」
「ゴム……つけてなかった。わたし、帽子のゴムするのイヤだからしてなかったの」
……？
この子と僕は初対面のはずなのに、やけに親しげに接してくるな

……。
まぁ、悪い気はしないのでそのまま話を進める。
「あ、わかるわかる。僕も小学生のころゴムつきの帽子だったんだけど、なんか締め付けられる感じがイヤですぐ切っちゃってたよ」
「そうそう。わたしも～」
何故か見知らぬ女の子と話を進めていて少し経った頃、不意に目の前に大きめの影が現れた。……がっしりした体格の青年だ。
「よぉ、待たせたな」
「あ、和也くん……。もぅ、遅いよ」
「悪い。少し道に迷っちまった」
「……もういいよ。仕方ないもんね。和也くん方向音痴だもんね」
「ははっ、勘弁してくれよ。……そちらは？」
「あ、さっき知り合ったの。帽子が飛ばされちゃった時に取ってくれて……」
「そうか。……都萌が世話になったな。おれは中村和也。一応、こいつとお付き合いをしてるってことになって……いる……」
「そうだったんだ。僕は嶺山拓真。僕もいちおう、彼女を待ってるんだ」
「あ、やっぱり拓真くんだったんだ……。ねぇ、彼女って凛子ちゃんのことでしょ？」
「……！？　なんで知ってるの？」
「えへへ。実はわたしね、凛子ちゃんとおんなじ学校行ってるんだ。拓真くんのことも聞いてるよ。ちょっと頼りないけどすごく優しいっていっつも言ってるよ～」
「……」
「おい、ちょっとショック受けてるみたいじゃねぇか。もう少しやんわりと言った方が……」
「……あぅ、ごめんなさい……。くすん……」
「……いや、いいよ。泣かないでよそのくらいで」
「ホント、お前っていい奴なんだな。圭輔の言う通りだ」

「……！？　圭輔って、秋野圭輔くん？」
「ああ。実は、おれも奴と同じ学校に通ってるんだ。ミネタクって呼ばれてたんだって？　もしよければ、おれにもそう呼ばせてほしいんだが。おれの事も好きに呼んでいいから」
「あ、もちろんだよ。……それにしても世間って狭いね」
「まったくだ。あいつ、他にもなんか多方面に繋がりありそうだから、あいつさえいれば友人には困らないだろうよ。……あ、来たんじゃないか？　待ち人が」
　和也くんの向く方に、僕も向き直る。すると、駆け足でこちらに来る女の子がいた。……リンリンだ。
「はぁ、はぁ、はぁ……はぁ～。ごっつぅキッツイわぁ。ごめんなタッくん、待ったやろ？」
「いや、別に……。みんなと話せてたし」
「ふえ？　みんな？　……あー！　ともちゃ～ん！　来てたんか？」
「そうだよぉ。わたしたちもこれからデートなのぉ♪」
「う……。そ……、そういうことを大声で言うな。恥ずいだろ……」
「あ、この人がともちゃんの彼氏さんやね？　ふわ～、おっきくてカッコええなぁ」
「うん♪　久しぶりに会えたからいっぱい甘えちゃうの♪」
「ほな、挨拶せなな。……えと、うちは柚月凛子いいます。ともちゃんとは同じ学校のお友達なんよ。仲良うしてな？」
「ご丁寧にどうも。……おれは中村和也。好きなように呼んでくれていい」
「あー……、わたし拓真くんに自己紹介してなかった。……えっと、わたしは中川都萌といいます。お友達になってくれる？」
「うん、もちろん！　嬉しいなぁ、友達が増えたよ」
　見るからにスポーツマンとわかる和也くんと、小動物のようなかわいさを誇る都萌さん。
　この瞬間、２人と友達になることが出来た。幸先がいいや。
「……ほな、今日はせっかくやからダブルデートってことでええか

みんな？」
「僕は別にいいけど、リンリンはそれでもいいの？」
「言い出しっぺのうちがイヤなわけないやん。な？」
「それもそうだよな。……うん、おれもそれでいいよ。都萌は？」
「わたしもその方がいい。みんなと一緒の方が楽しいもん」
「ほな、それで決まりや！　どこ行くか決まっとる？」
「う～ん、わたしたちは遊園地に行くつもりだったんだ。それでいい？」
「うん、いいよ」
「そいつは好都合だ。実は、チケットを余分に持ってるんだ。こないだ新聞を新しくした時にもらったやつで、期限が今日までなんだよなぁ」
　そう言うと和也くんは、封筒からチケットを４枚取り出した。
「３人家族の家に４枚も渡す奴があるかって話だよな。どう頑張っても１枚余るからってことでおれに全部押し付けてきたわけさ」
「もしかして、くれるん？　それならいただくで～。おおきに～」
「むしろもらってくれないと、こいつがただの紙切れになっちまう。さ、受け取ってくれ」
「ありがとう！　よかったね、リンリン」
「うん！　それじゃみんな、行こうか？」
「おーっ！」

　僕らは海沿いのテーマパーク『オーシャンズオリエント』に来ていた。やっぱり休みの日だ、人が……。
「ふわ～、ごっつぅ人おんねんな」
「ここはいつもこうだよ。これでも少ないくらいよ？」
「……時間が惜しい。ともかく楽しもうじゃんか」
　僕らは、混んでいるなりにいろいろなアトラクションに向かう。
　その間もリンリンは、僕の腕を掴んで離さない。
　少しでも離れたらはぐれてしまうと思ったか、それとも……。

いつの間にか日は暮れ、いよいよパレードが行われようとしていた。
だけど都萌さんが『人ごみがイヤ』と言ったので、僕らは観覧車に乗って上から見ることにした。
「ほな、またあとでなー」
「うん、またねー」
乗る前に挨拶を交わす女の子たち。そして、ゴンドラに乗り込む。

「ふわ～、キレイやな～」
「そうだね。もうこんな高くまで上がってるんだ……」
「もうすぐ一番上やよタッくん。もっとゆっくり動けばええのにな」
「そういうわけにもいかないよ。まぁ、そうあってくれたほうがいいけどさ」
「……なぁ、タッくん……？」
「なに？」
「……学校違うても、うちらの関係は変わらへんよね？」
「もちろん」
「……そうよね。変な事聞いてもーた。ごめんね」
「謝らなくていいよ……。それだけリンリンが僕の事想ってくれてるってことだから」
「どうして……どうしてそんなに嬉しい言葉かけてくれるの……？
どうして……？　うち、どうにかなってまうよ……」
ゴンドラが頂上近くに差し掛かった所で、不意に彼女は僕に抱きついてくる。
「大好きやから、離れへんから！　だからタッくんも、うちを離さないで、ずっと愛し続けて……。これからどんな事があっても……ずっとずっとあなたと一緒に居続けたいの……」
「ありがとう……。僕も、あなたを離さないし、離れない。ずっと一緒に居る、そう誓う」

「……」
静かに交わす、誓いのキス。ゴンドラはちょうど頂上に到着していた。
愛しい彼女を優しく、そして強く抱きしめる。

これから何が待ち受けるかなど、今の僕にはわかるわけがない。
時には大いなる絶望に襲われることもあるだろう。
しかしそれでも道は果てしなく続くし、時間は待ってはくれないのだ。
長い……長い道の果てに待ち受けるもの、それを見つけるために僕らは歩いてゆく。
終わる事のない、果てない距離。
だけど、一歩一歩進んでいけば……きっと見つかるはずだから……。

ゴンドラを降りて、外に出る。
僕らの『Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｄｉｓｔａｎｃｅ』は、ここから始まるのだ。

番外編：終わらない距離の始まり

あ、ここからは語り手が変わります。
うち、柚月凛子に変わりますんで、間違えんといてくださいね。
ほな、いきます。

中学で幸せな体験をしたうちは、その幸せ気分のまま高校に入ってん。
うちの入った高校ってのがこらまたごっつ息苦しいところでな、やれスカートはひざ下５ｃｍから１０ｃｍにせぇだの、やれ髪の色は真っ黒に統一せぇだのってやかましいねん。
学校見学とかして少しはわかっとったはずやのに、ここまでやかましいとは思わへんかったんよ。やっぱりタッくんとおんなじとこ行けばよかったかなぁ……。

始業式後、クラス分けを見るためにホールに行く。そこで改めて他のみんなを見てみた。
女子校やからみんな女の子ってのは当たり前やねんけど、上品そうやなぁ……。うちみたいな子が打ち解けられるんかなぁ……。
でも、そんな心配は取り越し苦労もええとこやった。
そのホールにあるひとつの掲示板にクラス分けの紙が貼っつけてあって、それを見て各自のクラスに行くようになってたんやけどな、みんなええとこの子ばかりやったからぜんぜん揉めたりとかなかったな。
そこに、他の子より明らかにちっこい子がいたんよ。みんなに阻まれてクラスがわからんで半ベソかいてたから、うちは見てられなくなってこう言った。
「ちょっとすみませーん。道開けてもろてもええですかー？」

そしたらすぐに道開けてくれてな、おおきにって言いながらついでにうちもその子と見に行ってん。したら……。
「……あっ！」
なんと！　その子とうちは同じクラスやったの！お互いに指滑らしてたらぶつかってな、それで同じやってわかったの。
彼女の名前は中川都萌ちゃんっていうてな、背ぇがちまっこくてめっちゃかわいい子なんよ。
ともちゃんと一緒にうちらのクラスに行く。1年E組……。いークラスね。……寒っ。

教室の中に入ったら、もうすでに何人かおった。
ふわ～、みんなキレイやな～。ホンマ、お嬢様って感じや。
「な、なぁともちゃん？　うちら、場違いっぽくあらへん？」
「そう……だね……。わたし、うまくやっていけるのかなぁ……？
中学の時のおともだち、みんないないし……」
「そーなんや……。ま、それはうちもおんなじや。せやから、うちが今日からともちゃんのおともだちや。な？」
「うん！　ありがとう、凛子ちゃん！」
「……ほな、ちょっくらあの子たちに声かけてみるね」
「うん、がんばってね……」
ともちゃんに背中を押され、うちはそこにおった3人組に話しかけてみた。
「あの、えっと、お……おはよーさん！」
あっちゃ～。うち何アホな事言うとんねん。声上ずってもうたし……。でもその子たちは……
「あ、おはよう。どうしたの？」
って返してくれたんよ。それでうちも何とか続けたのね。
「えっとな、早ようみんなに溶け込みたい思て……声かけてみたんやけど……」
「そういうこと。いいわよ。私たちもついさっき知り合ったばかり

なのよ」
「ふわ～、そない仲ええのに今さっき知り合うたばかりなん？　……あ、そうや。あっちにいる子も呼んでええか？」
「ええ、いいわよ」
「やったぁ！　ほな、ともちゃんおいでーな」
「う、うん……」
うちが呼んだのにまだオドオドしてるともちゃんを、うちは半ば引っ張るようにして引き寄せた
。……その時、手の中に明らかに違うもんの触感を覚えた。
手を離してよく見てみると……それは指輪やった！　しかも左手薬指！
そ……それって……。アレやろ？　思わずうちはともちゃんに聞いてもうた。
「と……ともちゃん、それって……何やの？」
「これ？　指輪だけど？」
「いや、そりゃ見ればわかんねん。どーゆー指輪なんかなー……って」
「……聞きたいの？」
「興味あるわね。私たちも聞きたいなぁ」
さっきの子たちも興味深そうな顔やった。そら気になるわよね。だってそれって……きゃ～～～！
「えっとね……。わたし、付き合ってる彼がいるの。ちょっと前にね、ここに合格したお祝いってことでお揃いの買ってもらったんだ」
「そ……そーなんか……。よかったなぁ、優しい男の子と付き合えて」
「うらやましいな～。ねぇみんな？」
後ろの子たちもうんうんとうなずく。
しっかし……ともちゃんにはすでに彼氏さんが居ったんか～。おとなしそうな顔してやる事は早いのね。
ま、それはうちにも言えた事なんやけどな。

今日は始業式だけの半ドンで終わった。
え？　今どき半ドンなんて言葉使わんって？　……ほっといてーな。
「終わったな～。なぁなぁ、どこ行く？」
「えっ？　まっすぐ帰りなさいって先生が……」
「そんなんてきとーに聞き流しー。クソ真面目に守ってたらぜんぜん遊べへんよ？」
「でも……見つかったら……」
「大丈夫やって！　な？　ほな行こ！」
「あっ……」
半ば強引に、うちはともちゃんを遊びに誘った。

「もぅ凛子ちゃん、見つかったらどうするの？」
「平気やて。見つかったかて退学させるわけやあらへんしな。……でも今日はホンマすまんな、お詫びにお昼奢ったるわ」
「いいの……？　いいならそうしてもらっちゃうけど……？」
「かまへんかまへん。まだお小遣い残っとるし」
「それじゃ……お言葉に甘えちゃおっかな」
やっと笑顔の戻ってきたともちゃんを連れて、うちらは街の中心部に差し掛かった。そしたら……。
「ねぇちょっと。あれ……」
「ん？　……おお！　凛子ちゃん！？」
「やっぱりそーよね！　いこいこ！」
「あ？　どこ行くんだよお前ら。めんどくさそうだから俺帰るぞ？」
「つれねーこと言うなよ～シュウよぉ。せっかくだから、ほれ！」
「うおっ……！」
向こうから話し声とともに誰かが近づいてきたんよ。それは……圭輔くんとみさきちゃんやった！
ふわ～、久しぶりやんな～。圭輔くんなんか明らかに背ぇ伸びてんやん！　みさきちゃんよりちっさかったのに今では追い越しそうな

勢いや。
「えっ……？　まさか、みさきちゃん？」
「そうよ、みさきちゃんよ！　凛子ちゃんおひさー。こーしてまともに話したのって卒業式以来だっけ。元気してたー？」
「もちろん！　みさきちゃんこそ元気そうでなによりやわ。圭輔くんも？」
「あったりまえよ！　それよりどうだよ凛子ちゃん。オレ、背ぇ伸びたぜ！　まだ伸びるぜ！」
「そうなのよー。なんかこいついきなりでっかくなっちゃってさー。……で？　そっちの子は？　妹？」
「ちゃうねんて！　この子はね、うちの新しいおともだち。ともちゃん、挨拶しぃや」
「うん……。えっと、わたしは中川都萌といいます……。は……はじめまして……」
「……ぬおおおお！！　かっわいい～～！！　すげーかわいい！」
「落ち着けよ。みっともねーぞ、街中で騒ぎやがって。そりゃな、確かにかわいいけどよ」
「そーよそーよ！　何よバカみたいにはしゃいじゃって、進歩ないのねー。あ、アタシは原田みさきよ。みさきって呼んでね。よろしくねともちゃん！」
「よ……よろしくね。みさき……ちゃん？」
「きゃ～ん、かっわいい～～！！　ちっちゃ～い！」
「……お前もかよ。ったく……。……俺も名乗っておかないとダメか。俺は手塚周一。シュウとでも呼んでくれ。よろしく」
「あ、うちは柚月凛子いうねん。呼び方は何でもええよ。よろしくね。シュウくん！」
「あぁ」
シュウくん……か。ちょっとぶっきらぼうな感じ受けたけど、根っこは悪い人やなさそうね。
圭輔くんもみさきちゃんも相変わらずやし、みんな離れても変わっ

とらんのね。

うちらは5人になったから、時間もあることやしちょっとだけ遠出してみた。

まだみんなお昼食べてへん言うことやったから、まずはご飯を食べることにした。

「ともちゃんはうちがおごるからええよ。何にする？」

「えっとね……。うんとね……」

「はは、そんな急いでねーからゆっくり選びな。……ってか凛子ちゃん、その制服ってアレだろ、すっげぇ頭のいいお嬢様な女の子しか行けないとこのやつだろ」

「うん。せやけど意外にみんな気さくなんよ。そらやっぱ頭よさそうやけど、そんな勉強しかできんわけでもないと思うし、みんなが言うほど堅苦しいとこやないよ。ね、ともちゃん？」

「う？　うん……。う～……、どれにしようかな……」

ともちゃんはまだ迷っとった。その姿はホンマ、抱きしめたくなるほどかわいらしかったんやけど、そこはそこや。うちが抱きつく相手は後にも先にもタッくんだけやもん♪

……でも、みんなでワイワイやっとる中でも、なぜかシュウくんだけはうかない顔して外をぼけ～っと見とんねん。あんまりにも気になったから聞いてみたんよ。

「なぁシュウくん？　どないしたん？　楽しくないの？」

「え？　何で？」

「だって……あんまし楽しそうにしてへんから……」

「そうか？　俺はそんなつもりないんだけど。そういうこと、勝手に決めないでくれるかな」

「ご……ごめん……」

「んなことで謝るなって。めんどくせぇ」

「……」

なにがめんどくさいんやろ……。ホンマもんのものぐさやわこの人。

でも……根は悪くないよね？
彼氏いるうちが言うのもアレやけど、結構カッコええ方に入ると思うし、おとなしゅうしとけばモテるんちゃうかな……？
よーし、聞いてみよ！
「なぁシュウ君？　シュウ君って好きな子おるん？」
「は？　いねぇ。めんどくせぇよそういうの」
「そう……なん……？」
「そういう凛子ちゃんにはいないのか？」
「ふえっ！？　うちは……おらんよ。考えてもみぃ。うち、女子校やねんよ。男の子との出会いなんてそうそうないやん。な？」
「それもそうか。ま、せいぜい頑張ってくれってこった。俺には関係ないけどな」
う～……。いちいちカチンとくる言い方するんやねシュウ君って……。こういう人と付き合う事になってもーた子は大変やね……。その点うちはよかった～。タッくんものごっつい優しいし、うちのことといっつも気にかけてくれるし……。はぅ～、うち幸せや～♪
「……ちょい、ちょい！　凛子ちゃーん、どないしたのー？」
「わっ、みさきちゃん……。うちのしゃべり方うつっとるよ？」
「ちょっとマネしてみただけよ。難しいからもうやんないけどね。それよりさ、いったいどーしちゃったのよ？　ニヤニヤしながら上向いちゃったりして。正直キモかったよ？」
「う……うちそないな事しとったん！？　イヤや～、もうお嫁に行けへん～」
「大丈夫だって！　いざとなったらオレがもらってや……あがはぁっ！？」
圭輔くんがなにか言い始めたと思たら、みさきちゃんの非情なツッコミが決まっとった。
前よりもパワーアップしとるやん、机のカドにぶつけるなんて……。こないな事されたら素でくたばってまうで……？　よく平気やな……。

「またつまらないバカを相手にしちゃったわ……。バカが伝染るわ。けど、そんな心配しなくても大丈夫よ。そういうところも凛子ちゃんのかわいい所なんだからさ、ねっ？」
「う……うん」
「……あ、凛子ちゃん。ちょっと耳貸してくんない？」
いきなり真剣な顔になったみさきちゃんがうちに問いかける。うちは言われるがまま、みさきちゃんに耳を近づける。
（……凛子ちゃん。アンタ、今付き合ってる奴いるっしょ。さっきシュウに言った事はウソでしょ？）
（……なんでわかるん？）
（言いたくないなら言わなくたっていいけどね……。なんとなくわかるのよ。さっきの凛子ちゃんの目は、恋してる女の子の目だった）
（えっ……？）
（ほら、ともちゃんもたま～に遠く見てたりするけど、さっきの凛子ちゃんと同じ目してるもん）
（ともちゃんはね……左手見ればわかるけど、好きな人おんねんな）
（そりゃ見りゃわかるわよ。いいわねー、うらやましいわホントに。……でもいいわ。とにかくね、誰と付き合ってるのとか聞かないであげるからこれだけは言わせて）
（な……なぁに？）
（……幸せになりなさいよ。わかったわね）
……みさきちゃん？　なんなんや……？
目でわかってまうなんて……。うち、そないな目しとったか？
そや、ともちゃんはどないな目ぇしとんのやろ。……あ、なんかとろけとる。
上向いてるように見えて、目の焦点が合っとらんみたいな、そんな視線やった。
……うち、こんな目ぇしとったんやな。うちでもわかるんやから、みさきちゃんならすぐわかるわな……。これからはちっと気をつけよっと。

「なぁともちゃん？　ちょっと聞いていい？」
「……はい？」
「その指輪なんだけど……」
「これ？　彼に買ってもらったの～。うふふ♪」
「……やっぱなぁ。やっぱいるんだよ。だよなぁ、こんなかわいい子、男は放っとかねーよな」
「右に同じ。和也がいたらなんて言うかね？」
「あいつはどうだろう……。奴も指輪してやがるからなぁ。まったく……俺とシュウを差し置いて……」
「えっ……？　和也って……？」
「あ、ホントはもう一人来る予定だったんだけどね、学校終わってからすぐ病院行っちゃったのよ。なんか中学の時、肘壊しちゃったとかで通院してんだって。かわいそーよねー」
「和也くんだ……！　みんなと同じ学校だったんだ……！」
「え？　ともちゃん知ってんの？」
「知ってるも何も……。その人がわたしの彼だから……」
「な、なんだって～～～～～～！？」
お店を揺らさんばかりに、うちらは盛大に驚いた。なんちゅうこっちゃ……。
つながりって、ホンマ身近にいくらでもあるもんやね……。世間って狭いわぁ。

みんなと別れたあと、うちはタッくんの家に向かった。
もう両親公認の仲やからいきなりお邪魔しても大丈夫やねんな。
……でもこの日は誰もおらんかった。うちの逢いたい人以外は。
「は～い……。あ、リンリン」
「えへへ、来ちゃった。上がってええ？」
「もちろん。今みんな出かけてるからゆっくりしてってよ」
「そのつもりやもん♪　甘えさせて～な～」

「わっ、わかったよ……。ほら、僕の部屋行こ？」
うちはタッくんの腕を掴みながら、彼の部屋に行く。
そこは相変わらず殺風景で、やたら広々としてんねん。ま、散らかってないって証拠でもあんねんけどな。
「あ、なんか飲み物持ってくるよ。リンリンはここで待ってて」
「いや！　うち、少しでも長くタッくんといたいねん。せやから一緒に行くの！」
「わかったわかった。まったくわがままなんだから……」
「タッくんの前ではわがままちゃんになるんよ。唯一、うちの本当の姿をさらけ出せるんやから……」
「リンリン……」
「タッくん……。好きよ……」
自然と、うちらは唇を重ね合わせていた。
タッくんがうちを愛してくれる。うちもそれに負けないくらい彼を愛する。
あう……。うち、とろけてしまいそうや……。
うちは彼を抱き寄せて、仰向けになる。タッくんがうちの上に来るように。
「リンリン……？　どうしたの……？」
「ん……。タッくん……。このままで……いたいねん……」
「……うん」
少し照れていたタッくんが初々しい。
うちはそんな彼とさらに密着する。彼の全てを……全身で感じたいから……。
そして、うちの全ても……彼に感じて欲しいから……。

うちらだけの時間は、光のようにあっという間に流れていった。
幸せを共有してから、ゆっくりと家に帰る。そして、制服姿のままベッドに入る。
（はぅ……。タッくん……）

枕を抱きながら彼の名を呟く。毎日逢えへんわけやないけど、こうなると逢えない時間も憂鬱になってくる……。
逢いたくても逢えへん人も居るこの世の中で、うちみたいな悩みはホンマに贅沢な悩みやねんけど、うちにとっては重大な悩みや……。
中学時代の恩師、ちなみ先生も外国に行ってもーた彼をずうっと待っとった。
ホンマに相手のことが好きなら、いつまでだって待てるもんや。
せやから……うちも……タッくんと2人だけで暮らせるようになるまで、待たなアカンねん。
いつになるかわからんけど、一人で生活できるようになるまで頑張らなアカンねん。
……でも今のうちは、両親から自立できてない。そんなんじゃ2人っきりで暮らせない。そんな資格ないもん……。
幸せな未来に目を向けるより、目の前の現実を、越えなアカン壁を見据えなきゃ……未来の幸せはあっけなく崩れてまう。
将来の幸せっちゅーもんは、今のうちから土台をしっかりと固めたうえで成立すると思うねん。
そうでないと、小っさなきっかけであっという間に終わってまうからな。
せやから今から頑張らな……。この手に幸せをつかむ、その日まで……。

「行ってきまーす！」
今日もいい天気。朝の日差しを一身に浴びて学校に行く。
うちらの『Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｄｉｓｔａｎｃｅ』はまだ始まったばかりや。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2446o/

Endless Distance

2011年1月11日23時13分発行